ようこそ綾小路がいない教室へ

孤独なバカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしホワイトルームというものが存在せず、綾小路が存在しない世界だったのなら。

代わりに入学した少年はこの学校の仕組みに入学前から気づいていたのなら。

これは綾小路がいないＩＦルートの話

ヒロイン追加のためタグを変更しています。一応ヒロインは桔梗は確定で後二人を想定しています

目次

プロローグ 1
Sシステム 5
静観 12
需要と供給 16
ネタバラシ 27
ポイントの使い道 35
櫛田の才能 43
中間考査の攻略法 52
写真友達 61
図書館での騒ぎ 67
大江派と平田 73
変化の時期 78
日常 84
助けを求めて 90
人を育てる 95

プロローグ

君は君だよ。『君らしく』なんて曖昧なものじゃない。何やったって変わったってカンケーない。君はどうせ君だよ。

四月は君の嘘　宮園かをり

……なんでこんな学校に

と足取りが重い気持ちでその少年はため息を吐く。

この少年大江奈緒。女性の名前っぽいがちゃんとした男性として籍を持っている少年は今年から入る東京都高度育成高等学校に向かうバスに揺られながら気分がうんざりしていた

実はこの少年はこの学校に行きたくて行ったわけではない。

……両親に決められて奈緒はこの学校に行ったのだ

一応両親は有名企業のいいとこの重要職でありかなり地位も高い。なので両親がそれが苦痛だったのだ

それが奈緒にとっては苦痛しかなかった。

中学生のころから英才教育があり、面倒臭いの一言でサボることが多くクラスメイトと野球やサッカーなどで遊ぶことが多かった。

しかし奈緒はいたって真面目な生徒だった

ほとんどの授業をまともに受けており、口であぁこう言っておきながらも実際は予習復習を欠かさない。だから成績もすでに上位を保っていた。

至って普通の真面目な生徒でいながら自由を欲しているのだ。

ガタガタとバスに揺られながら俺は学校へ向かう。

今日も面白そうなことがなさそうだな

学校に着くと俺はDクラスと書かれておりただ一人のんびり天井を見ていた。

クラスがギャーギャーと話しているが俺はある一点を見つめていた。

……多いなやっぱり。

それは巧妙に隠してあるカメラの数だ。明らかに防犯対策とはい

え多すぎる
　元々俺の部屋のカメラも監視目的で入っていたし施設に入れられた時も元々電子工学を得意にしているので全部隠蔽をして脱出した経緯をもっている。
　だから親も何も言わなくなった
　言わなくなったのだが才能をどうしても使いたかったらしい
　だからこの学園に入れたのだ。
　俺自身監視もされるってことにかなり臆病になっている。
「……」
　怪しいな。どう考えても怪しい。
「へぇ～君も気づいたんだ？」
「ん？」
「本当にバカバカしいわね。この学校。……本当に面白いっていうからこの学校を選んだっていうのに。あんなにわかりやすかったらね。」
　そういうとツインテールの女子が明らかにため息を吐いたようにこちらを見る
「監視カメラのことか？」
「えぇ当然よ。隠されているやつ含め１０個ほどじゃない？」
「まぁ発動していない監視カメラを抜いたらそれくらいか。」
　すると頷く少女に俺はため息を吐く。
「んで？お前は何で俺に声をかけたんだ？」
「えっ？面白そうだったからかな？」
「面白い？俺がか？」
「えぇ。全てを分かったようにしている。まるでこの学校にいたかのように。」
「……いやそんなつもりはないんだけどな。ただ多少他のクラスよりもこのクラスはレベルが低いように感じたからな。」
　さっき他のクラスの少女がほほうと感心を向ける。
「やっぱりそうなのかな？」
「あぁ。入学式始まる前に他のクラスの前を通ったからな。まぁいう

とすれば極端すぎるかな？」
「……続けて？」
「簡単にいうならば後方の席に座っているあいつとか誰とも話していない。逆にあの金髪ポニーテールは発言の内容に少し間違いが含んでいるし。いうなれば明らかに才能が一つに傾いている、もしくは何か一つが明らかに欠陥している。」
　するとその少女は驚きに満ちた表情になる。
「……何でそこまで分かるの？」
「さぁな。自然と目につくんだよ。本能的に意味のないことをしている連中は。」
　俺はそんな面白みのないようなつまらないような顔になってしまう。
　本当につまんない。
「……ふふ。やっぱり君は面白い。」
「…面白いってひどいやつだな。俺は普通の人間だぞ。」
「奈緒って女の名前みたいな名前なのにかい？どこぞのアニメ好きのアイドルみたいじゃないか？」
「…いや。確かに奈緒っていえば神谷奈緒を思い出すけどさ。てか名前どこから知ったんだよ？」
「クラスわけの時に視線でね。バスのときから一人だけ何か考え込んでいたからつけていたんだ。」
「ストーカー宣言するなよ。……てか元々俺は進路はここの希望じゃなかったんだからな。」
「どこ？」
「大北沢高校。」
　知らないと首をかしげると俺は苦笑する
「そりゃ知らないはずだ。家の近くの偏差値も５０ちょっとの学校なんだから。」
「……成績普通くらいなの？」
「いや。自分でいうのもなんだけど成績はそれなりにいいと思っているぞ。器用貧乏なだけだけどな。」

「器用貧乏って。自分でいうのかい？」
「生憎な。苦手な教科も得意な教科もない。ただの成績がいいだけ。成績だけよくても社会にでたら通用しない。」
「ええ。同感だね。恐らくこのクラスの基準は。」
「中学校時にどれだけ爪痕を残したか。もしくは何か一つに優れたやつか？特に最初の方は悪い方で。」
　とここで気づく
「てかお前誰だよ。俺の名前知っているのにお前の名前は知らないってよく考えたら変じゃねーか。」
「僕？僕の名前は岸田美帆。小学校のときからみんなからミホって呼ばれていたから君も名前呼びでいいよ。長い付き合いになると思うし。」
「……まぁどっちにしろ長い付き合いにはなるだろうな。」
　と俺はため息をつき天井を見る
　監視カメラのレンズの無機質な丸みがこの教室のとても印象に残ったものであった

Sシステム

人は、平等ではない。生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な体を持つ者、生まれも育ちも才能も人間は皆、違っているのだ。そう、人は差別される為にある。だからこそ人は争い、競い合い、そこに進歩が生まれる。不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ！

コードギアス反逆のルルーシュ　シャルル・ジ・ブリタニア

しばらくすると始業のチャイムが教室内に響き、それとほぼ同時に一人のスーツ姿の女性が現れる。

彼女は正しく社会人といった具合にきっちりスーツを身に纏っていた。歳は三十に届いているかいないか。やや長い黒髪を後ろに束ね、ポニーテール調といった具合だ。

恐らく彼女が担任だろう。

彼女が教卓に向かう数秒の間に、席から立っていた生徒たちは慌てて自分の席に戻った。

「新入生諸君。私はこのDクラスを受け持つことになった茶柱佐枝だ。担当科目は日本史だ。当校では卒業までの三年間クラス替えはしない。よって、私たちは三年間共に過ごすことになる。よろしく。今からおよそ一時間後に入学式が行われるが、その前に当校の特殊なルールについて説明をしたいと思う。まずはこの資料を配布したいので、前の生徒は後ろの生徒に回してくれ」

そう言いながら茶柱先生は一番前の席の生徒たちに見覚えのある資料を渡し、そう指示してきた。

確かあれは、合格通知と共に送られてきたものだ。

この高等学校は、全国各地にある高等学校とは異なったルールが敷かれている。大前提として、生徒は在学中は学校が用意した寮で寝泊まりしなくてはならない。ここまでは寮がある学校とさした変わりは無いと思うが、違いはここからだ。

生徒は在学中、特例を除き外部との接触を禁じられている。

つまり家族との連絡は不可能。

さらには、学校の敷地内からの外出も禁じられている。
しかしその反面、政府主導で建立させただけはあるのか、生徒に不満を覚えさせないように手配されているのも事実だ。具体的にはカラオケやシアタールーム、カフェにブティックといった娯楽施設や、コンビニエンスストアにスーパーといった施設も存在するらしい。
そして最も異質なものがある。Sシステムの導入だ。
「今から配る学生証カード。このカードにはポイントが振り分けられており、ポイントを消費することによって敷地内にある施設の利用や売られている商品の購入が可能だ。まあ、クレジットカードだと思えばいい。敷地内で買えないものはなく、また学校内でもそれは同様だ」
学生証に振り込まれているポイントは1ポイント＝1円の計算になっている。
ポイントは学校側から無償で提供される。
「ポイントの使い方は簡単だから迷うことはないだろう。もし困ったらその場にいる職員に尋ねるように。それからポイントは毎月一日に振り込まれる。今現在、新入生のお前たちには十万ポイントが振り込まれているはずだ。無いとは思うが、もし足りなかった場合は申し出るように」
茶柱先生の言葉に、生徒はざわついた。
彼女の言う通りなら、現時点で、十万円という大金を得たということになる
学生のその金額は凄まじい効果を生み出す。
思い思いに周りの生徒と共に言葉を交わす生徒を、茶柱先生はおかしそうに笑った。
「意外か？　最初に言っておくが、当校では実力で生徒を測る。倍率が高い高校入試をクリアしてみせたお前たちにはそれだけの価値があるということだ。若者には無限の可能性がある、その評価のようなものだと思えばいい。ただし、卒業後はどれだけポイントが残っていても現金化は出来ないので注意しろ。仮に百万ポイント……百万円貯めていたとしても意味は一切ない。ポイントをどう使おうがそれ

は自由だ。男子だったら最新鋭のゲーム機が売られているぞ？　女子だったら様々な服屋があるぞ？　自分が使いたいように使え。逆に使わないのも手だな。もしいらないのならば友人に譲る方法もある。……ああ、苛めはやめろよ？　学校は苛めに敏感だから、もし発覚したらそいつは退学処分だ。では、良い学生ライフを過ごしてくれ」

と言ってから茶柱先生は去っていく。

たしかに一月に１０万という大金を振りこませるとこういう反応になるのは目に見えているのだが…

俺が最初に覚えるのは警戒心だった。

１０万というのは明らかに大金だ。

この学校にいられるとなると無料でもらえるとなると少しだけ違和感を覚えていた

何かがおかしい。

おかしいどころではない。明らかに金銭の無駄だ。

ここに入学できたのは確かに才能が何かがある人間ばかりだ。

自分も一つ才能っていうものはちゃんとある

でもそれを開花できるのはたった少しだけだ。

天才は才能があるからこそ天才ではない

天才は自分の才能に気づくから天才と呼ばれるのだ。

多少性格が悪かろうが女や男を誑かそうが後世では何も感じない人が多数だ。

功績は少しの悪癖を隠す。

それが俺はよく分かっていた

だからこそ警戒心を覚える。どういうことかを考えると俺は少し考えるが明らかに情報を足りていない。

「……」

少し頭を使うさっきの話を思い出せ。

と頭をフル回転しているととある二つのことに引っかかる

ポイントは毎月一日に振り込まれる。

今現在、新入生のお前たちには十万ポイントが振り込まれている

そういえば今現在ポイントが振り込まれるのは１０万ポイント。でもよくよく考えたら月ごとのポイントは１０万ポイントとは言われていない。
そして天井をみる。それは多くある監視カメラの数。
「……」
それは何を意味しているのか。
即ちこれは検査のための監視カメラ。
「……完全実力主義ね。」
よく考えたらそうそう美味しい話があるわけがない。
俺はこっそり今朝話したミホを見る。
すると少し笑っている。そして同時に俺の方を見てくるミホ。
そして立ち上がり俺の方に近づいてくる
「凄いよ!!１０万だよ。１０万。」
「そっちかよ!!」
と俺はツッコミを入れてしまう。
どこか抜けているミホに少しため息をつく俺であった。

「……ごめんなさい。つい目先のお金がちらついていて話を全く聞いてなかった。」
とこっそり抜け出した俺たちは廊下で少し話していた
「意外だな。あんまり金銭的なことを考えないと思っていたんだが。」
「あはは。僕の家はちょっと家族が多くてね。ここに通っているのも学費の安さって訳だよ。」
「あ～ここそこまで学費がかからないからな。」
なるほどあんまり金銭的に余裕がないって訳か。それなら仕方ない。
「そういう君は１０万って金額は驚かなかったね？」
「俺は逆。両親がいいところで働いているいいとこの坊ちゃんってわけ。確かに金銭的なことには困ったことはないけどその分強制力が強くてな。ここに通っているのも。」
「両親の命令ってこと？」

「そういうこと。」
　すると苦い顔しているミホ。意外にも理解を得ているようだった。
「意外だな。金銭的に裕福なやつって妬みを得やすいんだけど。」
「ううん。確かに僕は金銭的に困ってるけどでも家族は物分かりがいいし僕自身家族のことは好きだからね。お互いに苦労していることはわからないしお互いに幸福なのかも分からない。人は言葉にしなければ分からない生物なんだからお互いに反発していても結論は同じ学校に通っている友達ってことには変わりはないってこと。だから君の家庭環境は関係ないしこちらの家庭環境も関係ない。君がどんな人物なのかは今自分が見て確認する。元々人の価値は他人ではなく自分でつけるって決めている。」
「……へぇ～面白いなその考え方。」
　金銭的に余裕がないとはいえ確かにミホは今を楽しんでいるように見える。それは俺にとってはかなり面白いと考えていた。
「そういう君は家族はあまり好きではないみたいだけど。」
「俺は親の言うことは基本的に破っていたからな。防犯カメラを改造して抜け出してよく友達と野球やバスケをしてたな。」
「珍しいね。ゲームとかの話も通じているのに体育系なの。」
「ゲームは軽くはやっていたからな。でも体を動かす方が得意だった。一応これでも中学までバスケ部だったし。部活仲間や友達とだべっていた方が楽しいんだよ。」
「羨ましいよ。僕は家の家事で交友関係は築けなかったし。」
　それこそ意外だな。もうちょっと交友関係は広そうだったのに・
「僕と君全く境遇が違うんだね。僕は正直この学校に何で受かったのかも分からないのに。成績も運動もできないし。できることといえば家事くらいかなぁ。それと音楽や絵はずっといい評価もらっていたよ。」
「ん～確かになぁ。でもお前がいいやつってことは分かるしな。面白そうなやつってこともわかるし。てか本当に真逆なんだな。俺逆に全くできないんだけど。」
　苦笑してしまう。音感なし、絵心なしの俺にとってそう言う才能は

十分誇れるものであった。
「あれ？音痴なのかい？」
「直球だな。いや歌はまぁ普通だけど楽器が苦手。というより細かいことが苦手。」
「……あぁ。なんかそういう気がするね。ってそういえば教室で何を言いたかったの？もしかして学校のシステム？」
「月に入ってくる金額が恐らく変動するんだよ。」
「……どういうことだい？」
　すると今までの笑顔は消え真剣な様子になる。
「よく聞いていたら担任はポイントが毎月一日に増えることと現時点でのポイントが１０万ということしか提示がされてなかった。」
「なるほど監視カメラが多いのは学生の授業態度を見るためってことだね。」
「話が早くて助かる。そしてもう一つはプライベートポイントの使用法だ。」
　すると首を傾げるミホ。こいつ本当に金銭に関することだと話を聞いてないんだなっと思いつつ、俺が思っていることを告げた。
「恐らくこれは本当にこの学園で何にでも使える。もしかしたらプライベートポイントを使ったイベントが開かれる可能性が高い。」
「なるほど。それがこの学校の基準になるって、そういえばクラス替えがないって言っていたからクラスで優劣を決めるって可能性が高いわね。」
「あ～なるほど。そこに繋がるのか。そこがヒントになっているなんて思いもしなかったな。」
　よく考えたら色々とヒントがあるのかもしれない
「……う～ん。情報が少なすぎるな。ちょっと他のクラスの先生にも聞いてみようかな。」
「そうだね。僕も聞いてみるよ。」
「了解。」
　とこれからの方針を話合う。
　数時間前とは違い何か面白そうな学校生活に心を躍らせるので

あった

静観

やる気がない者にかまってやるのは義務教育まで
意志なき者は去る他ない
やはり俺の青春ラブコメは間違っている　ｂｙ　平塚静

「おっ？すげぇ。無料の品がいっぱいある。」
「一人あたり３つまでだけどスーパーで買うのならば１日３つは無料ってありがたいね。えっとこの中だったら卵とジャガイモとそれと。」
「……俺料理できないし弁当かな？ミホ６品まで買っていいぞ。」
「いいのかい？」
「あぁ。まず調理器具もないしまず料理ができない時点で無料製品は諦める他ないだろ？」
　俺たちは終わりのホームルームが終わるとすぐにスーパーに買い物に出ていた。
　料理ができるミホとできない俺ではやっぱり無料製品は活用できるのかやっぱり差が出てくる
「まぁそうだね。アテはあるの？」
「ない。まぁもやし炒めかなんかにしようかな？」
「もやし炒め？節約のため？」
「いや。ただもやしが好きなだけ。中華スープの素と合わせたら美味しいんだよなぁ。」
「……もしかして安っぽい料理が好きなのかい？」
「おう。ファミレスとか好きだぞ。というよりも金は裕福とは言え自営業ってわけでもないしな。友達付き合いでファミレスとかよく行くし回転寿司なんかも結構いくな。」
「…行ったことない。」
「……ん。今度行くか。たまには贅沢してもいいだろうしな。」
　と俺は軽く催促すると頷くミホ
「それじゃあこれからは僕が御飯を作ってあげるよ。」
「……えっ？」

「ほらお礼ってことで。それに恐らくだけど来月からはポイントはもらえないようになるだろう。そんな中でプライベートポイントの浪費は免れないだろうし。」
「……」
　すると俺は気づいてしまった
「お前何もする気ないな。」
「えぇ。というよりも今のクラスの他のメンバーを救済する必要があるのかい？それにポイントは惜しいけど普通に勉強して普通の大学に通う。別にそれでもいいと思うしね。僕はこの高校には学費の安さで来たわけだし。」
「俺は面白ければなんでもいいんだけどな。まぁ俺は反対に動こうとするか。恐らくポイントをかけた勝負なら基本的に」
「僕が動き始めるのは7月くらいかな。それまではクラスでの地位を作ることかな～。明日からは基本的に授業をちゃんと受けることとか授業マナーについて注意することくらいかな？」
「……えげつねぇ～。」
　それはこの学校の仕組みを分かっていると遠回しに告げているものだ。
「……目標は？」
「う～ん。卒業までちゃんといくことかな？私の希望大学もそこまで偏差値が高いってわけではないし。ちゃんと勉強すれば合格できるだろうし。」
「こういうところは似ているのか。俺もお前も。」
「そのようだね。内心の腹黒さとか。面白ければどうでもいいってところもね。」
「そうだな。」
　と俺は少し黒い笑顔になってしまう
　……さてどんな面白さに出会えるんだろうな。
　そんなことを考えているうちに1日目が終わった
　なお。ミホの料理はとても美味しかったことだけは記載しておこう。

あれから一週間がたった
翌日から授業が始まると俺たちの教室は騒がしかった
もちろん授業中もだがスマホを触ったり隣の人と話したり、もしくは睡眠をとったり遅刻をしたり、当たり前のことを当たり前にしていない学生が多数いる。
「はぁ。」
さすがに授業に集中できない。これが高校生がやることかとバカバカしくなってしまう
だからいつもの通り机を叩き俺は軽くクラスメイトを睨む
冷たい視線がクラスを包み込む。
これで一時期は話すことと携帯端末をいじることは止むだろう。
たく。本当に面倒臭いクラスに当たったものだ。
授業中のノートは分かりやすく綺麗にとる
黒板の中で大切な情報をとりそしてそれをノートに纏める。
それだけでいい。
元々これくらいのことは元々頭に入っている
そして数分後授業が終わるチャイムがなると俺は軽く1回体を伸ばす
「ふぅ。」
俺は肩を解すとそれから軽くプライベートポイントを見る。
そこには５９２３４１という文字があった
……本当に使い道ないよな。今月。
結論をいうならばプライベートポイントの取引は学生でもできること、またプライベートポイントを使った賭け事は教えてもらえた
俺はそんなことを思いながらポイントを見る。これはふたり分のプライベートポイントが入っており、ミホが俺に託したプライベートポイントも含んでいる
普通学生生活で友達になってすぐのやつにプライベートポイントを渡すか？
ミホがやっていることは実験とはいえ危険であることには間違い

はない。調理器具も１００円均一のものを買い、料理が俺はできないのでいつのまにかミホが俺の部屋で食べるのが当たり前になっていた

無料製品を買い漁りさらに授業などでポイントもらえる時がありそれを逃さずにゲットした結果である

「お疲れ。」

「あぁ。お疲れさん。放課後だけどどうする？」

「前に約束したファミレスに行ってみたいかな？ついでに授業で分からないところがあるんだけどいいかい？」

「別にいいぞ。分からないところがあれば教えてやるし。」

とミホと俺が話し合う。

正直カフェとかよりもずっと安上がりだしそれだけならば学生の範囲内だろう。

そうやって話しているとコツコツと足音をたてながら近づいてくる少女が見えた。

「えっと、大江くんと岸田さんだよね？私も一緒に行ってもいいかな？」

話しかけてきた少女はこのクラスでは有名だ。クラスのアイドル的存在で知れ渡っている櫛田桔梗という少女だ。コミュニケーション能力が高く誰にでも優しい少女として人気な彼女が満面な笑みで微笑んでくる。

「まぁいいけど。」

「そだね～でも今日なんでファミレスなの？」

「お前が行きたいって行ったんだろうが。」

そうだっけと少し苦笑しているミホ

「えっと、仲がいいんだね？」

「まぁな。」

「でも最近付き合い悪いけどね。」

「まぁ俺も色々と試したいことがあるからな。」

と俺は苦笑する。その後櫛田たち三人と飯を食べにいき、何事もなく1日がすぎていった。

需要と供給

法律ってのは世界を回すためにある。おまえを守るためじゃない
ワールドトリガー　ｂｙ空閑有吾
「……はぁ。スタイルでるからあんまりプールしたくないんだけど。」
「授業なんだから仕方ないだろ。てか珍しいよな。春からプールなんて。」
と俺がいうとミホはため息を吐く
運動嫌いのミホはプールも苦手らしい。勉強は数学の計算問題が得意で英語が苦手っていうことが分かっている。
小さなでもある為幼っぽく見えるのもあるのだろうが
「なんか今失礼なこと考えなかった？」
「気のせい気のせい。」
「むぅ～。」
「おはよう山内！」
「おはよう池！」
そんな話をしていると同じクラス池と山内がそれはもう見事な笑顔で挨拶を交わしていた。
慌てて時計を確認する。オレの感覚は正常だと認識したところで、オレは珍しいこともあるものだと感じていた。
彼らは学校が始まって一週間、遅刻こそしていなかったが、それでもギリギリの時間に毎日来ていた。ちょっと不気味でもある。
「いやあー、授業が楽しみすぎて目が冴えちゃってさー。眠れなかったんだよな」
「なはは、分かるぜ。何せ俺もだからな。この学校は最高だぜ、四月から水泳の授業が行われるんだから！」
するとクラスの女子がから冷たい視線が向けられるが全く問題なしらしい。
「水泳の女子の参加率かなり低いものとなりそうだな。」
「ただでさえここのクラスポイントは低いのにさらにプライベートポイントを減るんだね。」

「いや。恐らくもう残らないだろ。たく。改めて稼いでいて正解だったよ。」
俺が遊戯でできるのは麻雀。チェス、そしてトランプだ。その中で俺はトランプと麻雀で稼いでいる。
本来であれば賭け事などは賭博罪で捕まるのだが、ここはプライベートポイントということが幸いしている
賭博罪は元々金銭の譲渡に関する法令であり、先生が言っていた卒業後に金銭に変換できないということがここでの賭博行為を黙認することに繋がってくる。ここは実力主義の学校であり、さらにプライベートポイントが増える試験も今後出て来るだろう。
すなわちここではプライベートポイント＝金銭ではなくプライベートポイント＝個人の評価と表すのが最適だろう。
一応部活動の顧問の先生に聞いたところ賭博行為は認めているとのこと。プライベートポイントをしっかり払って複数の先生聞いたので後付けもしっかり取れている。恐らくプライベートポイントでクラスの移動などもできる可能性があると思っていいだろう。
まぁ今月は先輩たちのポイントも少なくなっているだろうし打ち止め時だろう。
「そうだね～今どれくらい？」
「う～ん。基本は７０万くらいかなぁ。先輩たちもほとんど限界だろうし。今月は打ち止めかなぁ。俺もそっち手伝おうか？」
ミホは俺の部屋で料理を作り、ミホの部屋に届けるという、寮を使ったレストランもかなり好評らしい。やはり他のクラスとの密約として使うことは可能でよく上級生が噂を聞きつけ１組限定でも材料費以外は全部利益になるビジネスはかなり好評だ。
「僕も２万近く稼げたけど、でもよくそんなこと思い付くね？」
「来月から入ってこないって思っていたら嫌でも案を思いつかなければ俺たちが破綻する。基本的に需要があればここではその利益をポイントとして支払う。一応寮には監視カメラがついているからな。証拠が残ることも合わせて基本的に個人的な正式の契約を結ぶのに一番適しているんだよ。」

そう。レストランではなく安心できる場所を買うことに意味があるのだ。レストランとしても好評であるのだが完全予約制で時間を貸すことが利益をうむ。特に女子寮の警備はかなり複雑であり強力だ。今はミホが俺の部屋に住み込んでいることも安心させる理由になる

料理で利益を回収しようとは元々思っていない。時間と空間で元を取ろうとしているのだ。

「まるで商人みたいだね。」

「需要と供給を見極めるのも俺の仕事だよ。だからクラス動かすにことを需要だと考えれば、相手に必要な供給するものは見えてくる。」

「……どれくらい先まで見えているの？」

「一応4月中のことだけ。この行為自体結構上級生にも目をつけられていると思っていい。これは学校のシステムをある程度理解しているって主張していることだと変わらないから、もしかしたら上級生の介入もあるかもしれないしな。」

でもこれで俺とミホがDクラスの代表格っていうことが他の生徒に広まるのも遠くはないことだろう。

そしてこの学校ではバイトは基本的に募集はしていない。しかし生徒会に申請をだし、学校内での商いをすることは売り上げの一部を生徒会に納める。即ち国に寄付することにより、出店が可能になる。

実は出店許可を出すのに一週間かかったこともあり始動が遅れたのもあるのだがそれは置いといて

時期的にもちょうどいいだろうしな。まぁ、少し動き出そうか。クラスに改革を与えるために。

さすがにこれ以上は見ていてもつまらないからな

静観者としては終わり

ここからはGMとしてこのクラスに導きを与えることにしよう

昼休みが終わるとすぐに水泳の時間がやってきた

「……はぁ。」

上を見ると未だに多くのクラスメイト達が休みを伝えたのか特に

女子が多いが欠席者が続出している。
「……ん～。どうしよっかなぁ？」
俺は考えながら開示する情報を考えていた。ルールの作成や色々なことを含め色々脳内で考えていた。
「あら？あなたはあそこの群れに参加しないのね？」
「ん？」
すると聞いたことのない女性の声がする。そこには黒髪の長髪の女子生徒がいた。えっと堀北だっけ？この雰囲気で参加するって結構すげぇぞ。
「あぁ。女子全員の敵になる必要なんてないだろ？生憎ダチに女子がいるからな。……つーかあれは男子でも引く。」
「……少しはまともな男子がいて安心したわ。」
「まるで俺以外の男子はまともじゃないみたいだな。三宅とか幸村とかは基本的に無害だぞ。……まぁ。ただボッチなだけでもあるんだけど。」
俺は少し思い出す。少しだけ情報を開示してみるか。
「そういえば堀北は知っているか？教室の監視カメラの数。」
「……？監視カメラの数？それがどうしたのよ。」
「Dクラス教室だけで１０台。ダミーを含めたら１２台あるんだぜ？」
「……えっ？」
すると堀北が驚いたようにこっちを見る。
「おかしいと思わないか？明らかに監視カメラの数が多すぎるんだよ。」
「それ本当なの？」
「あぁ。教室に戻ったらある場所を教えてもいい。俺が知っているだけだから本当はもっとあるかもな。廊下や階段にも基本的に２台あるしな。でももっと面白いのが逆に防犯設備が全くない場所。旧号館中心にない場所があるだぜ。特に化学室にカメラがないのはおかしいと思わないか？」
多分堀北はコミュニケーション能力が壊滅的な生徒だと普段の生

活から分かっているので恐らく気づくのであろう。
　それは危険物の話である。化学室は化学部が使用しているものであるのだが薬品保管のための化学準備室はさすがにあるのだが化学室は火災報知機があるだけで監視カメラの類は全くないのである。
「……確かにおかしいわね。」
「まぁおかしい場所は他にも色々あるけどな。」
　と俺は笑うと堀北はどこか首を傾げる。しかし何かを考えるようにし黙り込んでいるところで
「よーしお前ら、集合しろー」
　担任だと思われる先生から集合の号令がかかる。如何にもな体育会系の男性で、マッチョ体型がとても似合っている。男子からも女子からも一歩距離を取られそうだ。
「見学者は……十六人か。随分と多いようだが、まあ良いだろう。ただし、次回からは正当な理由なしでは見学は認めないからな」
　おっさん先生の言葉に、何人かの生徒が反応した。初回は参加するが次回からはサボろうと画策していたに違いない。
「早速だが、どれだけ泳げるか見てみたい。個々で準備運動をするように」
「すみません、先生。俺あんまり泳げないんですけど……」
「そうか。泳ぎに自信がない者は正直に手を挙げろ」
　一人の男子生徒を皮切りに、数名が恐る恐る手を挙げた。無理して怪我や事故を起こした時咎められることを忌避したのだろう。
「なるほど、よく分かった。けど安心しろ、夏までに俺がお前たちを泳げるように指導してやるな」
「えぇー。別に大丈夫ですよ。海に行きませんから」
「まぁそう言うな。泳げる奴はモテるぞ？　それに泳げるようになれば必ず後で役に立つからな」
　すると少し含みのある言葉を聞き逃さなかった。即ち泳ぐような試験があるってことか？
　モテるって言っても限度があるだろうしやっぱり何かあるって考えた方がいいだろうか？

先生の言う通り、個々で準備運動をする。教師がいる手前、皆真面目に取り組んでいた。そして、五十メートルを軽く泳ぐように指示が出される。
準備は軽めに泳ぐと周辺からおぉという声が聞こえてくる。
そして５０ｍを泳ぎ終わると全員からの視線を感じる
そのうちリーダー格の男子が声をかけてくる
「……えっと。」
「大江奈緒。そういえば自己紹介するのは初めてだよな。自己紹介するときあったけど俺はミホと廊下で話していたから最初からいなかったんだよな。」
「そうなのかい？僕の名前は」
「知っている。平田洋介だろ？このクラスでは櫛田に次いで２番目に有名だしな。」
と俺がそういうと苦笑する平田。
「そんなつもりはないんだけどね。」
「あぁ。でもリーダー格であることには限りないだろ？」
「えっともしかしてだけど水泳部なの？」
「いや帰宅だぞ。元々バスケだったけど捻挫が癖になったからな。」
「大江奈緒？……っ！もしかして奥田中の大江奈緒か？」
すると俺の一回り大きな男子生徒が俺を見る。
「あぁ。そうだ。」
「マジかよ。捻挫が癖になったって本当か？」
「須藤くん大江くんのことを、知っているのかい？」
「当たり前だ。こいつバスケットボールをやっているやつなら誰もが知っているはずだ。こいつ中学総体３連覇した奥田校で一年からずっとレギュラーをとっていたからな。」
すると全員の目が俺に突き刺さる。それは事実だ。実際バスケの強豪であるバスケ部に入り中学三連覇。また２年連続大会ＭＶＰに選ばれるなどバスケをしている人ならば誰もが知っていても過言ではない。
「…まぁ、捻挫って言って普通に運動したりする分には問題ないし基

本的にバスケもフルの試合は厳しいけどハーフくらいなら普通にできるから。さすがに全盛期と比べると少し見劣りするけど。」
「そうなのか？」
「まぁ時間があれば遊びでもいいし運動も好きだから誘ってくれ。怪我も部活とか本格的なものじゃなければ普通にできるしな。」
と簡潔に自己紹介をする。するとクラスメイト全員が泳ぎ終わったらしい。そして唯一泳げなかったのはミホだった。
ミホは２５ｍ泳いだところで足をつけてしまいこれで泳げない生徒一人となっていた。
……こんど教えてあげるか
「よし。それでは今から男女別に五十メートルの競泳を行う。種目は自由型だ」
と思った矢先先生がこう言った。
「一位を取得した生徒には俺から特別報酬として五千ポイントを進呈しよう。逆に、ワースト一位になった生徒には放課後を使い補習を受けさせるからそのつもりで。」
するとさらなる悲鳴が響いた。
生徒にとって放課後とは大変貴重な時間だ。それを補習になんて使いたくない。
「……なるほどそういうことか。」
俺は小さく笑う。そして俺はまずは観察することにした
「何か思いついたのかい？」
「ん？ミホか。」
「いいなぁ～泳げる人は。プライベートポイントを手にいれることができるって羨ましい。」
「これだって実力主義の一環だよ。まぁ今回はプライベートポイントの意味を確かめるいい機会になりそうだ。」
「……どういうこと？」
首を傾げるミホ。さすがに俺のやろうとしていることが分からなかったらしい。
さて仕掛けようか。

女子の方は櫛田に大きく歓声が上がっているが恐らく水泳部である小野寺の一人勝ちであろう。
そして男子は俺を抜けば高円寺が勝ちを掴むだろう。
体格が完成されており恐らく成長が早いタイプ。伸び代は少ないがそれでもアスリート並みの体格をしていることから基本的にはそれだけだ。
得意な分野での俺の勝利は変わらない。
女子は予想の通り小野寺が一位になり５０００Ｐｔをゲットした
女子の最下位は……参加数が少なかったからだろう。佐藤が最下位になっていた。
そして男子の番になろうとしたとき俺は動き出す
「先生いいですか？」
「ん？なんだ大江。」
「佐藤が補習を免れるようになるためのプライベートポイントはいくらですか？」
すると静寂がプールを支配する。
先生は面白そうにクラスメイトは不思議そうに俺を見ている
「ほう。もしかして佐藤って奴はお前の友達か？」
「いや。今プライベートポイントについて色々調べているんですよ。だからそのついでにしか過ぎません。」
「……なるほど。Ｄクラスに面白い生徒がいると聞いていたがお前のことか。いいだろう。佐藤の補習を免れるように必要なプライベートポイントは５０００ポイントだ。」
やっぱりか。俺は確信に変わる。５０００ポイントという文字が意味しているわけを
「先生取引をしませんか？俺がこの水泳で一度でも２位以下をとった時俺はクラス全員に１万ポイントを譲渡します。その代わり俺が二連続で一位をとった場合全員の補習の免除及び先生から１万ポイントをくれませんか？」
「っ!!」
すると見学者も含めてクラス全員がざわざわと騒ぎ始める。それ

は宣戦布告であり、俺自身一位になるという確信の現れだった。
先生でさえ冷や汗を流している
「……っ！本当恐ろしい生徒だな。自分にリスクがあることは分かっているのか？」
「ええ。先生たちなら俺のポイントの変動は知っているはずです。俺はそれを払えることも。」
「あぁ。それに関しては心配をしていない。お前の商売としての信用も関わってくるだろうしな。しかしこっちの対価が低すぎるのが問題なんだ。」
「なるほど。それならどれ位が相場になるでしょうか？それを言い値で俺はいいです。」
「そうだな。最低５万だが俺の小遣いからも出して７万というところだな。」
「……それではそれで。もし俺がその約束を守らなければもちろん退学扱いで構いません。目撃者もこれだけいるので証言は取れていると思いますし。」
俺は笑うとするとクラスから全員が驚愕したようにしている。当たり前だ。この時点で俺はすでに３９万ポイントを所持していることと簡単に退学をｂｅｔしたことが信じられないようだった。
「……ずいぶん派手なことをしたね。」
ジト目で俺を見るミホ。まぁ仕方ないか。
「悪いな。でもこっちの方が面白そうだったからな。」
「それは同意だけど勝てるの？」
「逆に聞くけど負けると思っているのか？」
「ううん。勝てない勝負をするタイプじゃないから絶対に勝てると思ってるよ。」
「…それでいい。俺を使うって決めたんだろ？それならお前は使えると思った俺を信じておけばいい。」
「……なるほどすでにお見通しってわけだね。それなら負けたら今日の晩御飯おごりで。」
「了解。」

使えるものは使え。要らないものは捨てる。
それが俺たちのやり方だ。
それならば俺はミホを使いミホは俺を使う。
これだけでいいんだ。
恐らくあぁは言っていたけどミホは本気でＡクラス入りを考えているのであろう。学校のシステムを理解しそして金の亡者と見せかけ俺を試した。
だからこそミホは面白い。
恐らくあいつは家族のためにこのままでは要られないのだ。恐らく家族のために奮闘していたのだろう。明らかの家事についてはもはやどこぞのお手伝いさんよりもずっと上回っている。
俺はスタート台に立つとすると視線が集まっている。
そして銃声がなり全員がスタートを切る。飛び込んだ勢いをそのまま加速に生かし減速を始める直前で水を掻き始める
効率よくそしてどんどん加速する。
そしてゴールに着く頃には後続を突っ切りトップで５０ｍを泳ぎ切る
「……２２．９だと。」
するとざわざわと騒ぎ始めるクラスメイトに俺は少しため息をつく
やっぱりなまっているな
水泳は半年ぶりだから結構体が重くなってしまっていることが実感した。
二着はやっぱり須藤か。俺は当然のように水から上がると体を伸ばす
「ふぅ。疲れた。」
「……ほう。やるじゃないか大江ボーイ。」
すると如何にもギザな高円寺が俺の方に近づいてくる
「ん？いや。加速がちゃんとなってなかったし今のは完全に俺のミスだよ。高円寺が全力を出したら抜けるだろ？」
「いや。さすがに無理なのだよ。私はこの水泳をお遊びにしか思って

いないんだよ。わざと手加減した大江ボーイの思い道理になる必要はないのだよ。」
「……お前も食えないな。」
俺は少し苦笑してしまう。本当なら実力を出してくれるようにギリギリの線を攻めたつもりだったのだが明らかにバレていたようだ。
「まぁ。それなら七万かっさらおう。」
「ずいぶんプライベートポイントを貯めているみたいじゃないかい？来月ポイントがもらえるにも関わらず。」
「……ん？なんでポイントがもらえるなんて思っているんだ？」
高円寺しか聞こえていない声でボソッと呟く。
すると高円寺は少し驚いたようにしていたがクスッと笑い
「やっぱり大江ボーイはずいぶんと頭が回るようだ。なるほどね。大江ボーイそういうことかい？」
「内緒な。少しクラスメイトには痛い目見せた方がいいだろうしな。」
すると高笑いをしてスタートラインへと向かう高円寺。
恐らく高円寺はあぁ言うタイプだが決して授業中などはおろそかにすることはないタイプだ。
そして運動能力も高いことは言う知らずだった。
結果高円寺は俺と同じように少しだけ手を抜いて泳ぎ２３秒台で二回連続で二着。俺は一人だけ２２秒台で泳ぎきり二連続で一着。即ち七万ポイントを手にいれることに成功したのであった。

ネタバラシ

自分から動かないで手に入る物などありません。恋愛だって攻めあるのみです。

ニセコイ　ｂｙ橘万里花

月終わりのとある２時間目。いつものように授業中は騒がしかった

いやいつもの通りではなく水泳の時間から須藤と数名の生徒に限っては真剣に授業を受けるようになった。

それは俺が須藤の朝練を付き合うこと条件にいくつか条件をつけたのだ。捻挫を頻発させるのではなくて俺自身体を動かすのは好きだしちゃんとウォーミングアップと終わりのクールダウンはしっかりとこなしているので今の所は再発をしていない。

須藤曰く俺と手合わせできるだけでバスケの上達が早くなるとのこと。一応強豪中の練習メニューなどを伝えたりしてバスケ部に招待されたりなど最初の須藤とは大きな違いになった。本当にバスケのことなら熱心になる須藤には正直羨ましさと少し嫉妬してしまう。俺にはそんな夢がないんだから夢のある人物は尊敬するのだ。

ついでに食事についても俺が基本的には支援する形になっている。将来性にかけて須藤の運動能力は確実に今後クラスのために生きてくるだろうと思えたから俺たちが晩飯と朝食は支援すると言う形をとったのだ。

さらに佐藤と松下、幸村という生徒が俺についたのも大きいだろう。

松下は俺と同じように恐らく腹黒い性格を持っているのは俺ですら感じていたことだった。だから利用価値があるっと思えば簡単なのだが…

いや違うか。松下は俺と同じようにスリルを楽しむ人間だ。だから平坦な人生ではなくスリルを求めて平田たちのグループから離れたんだろう。

俺がすることを見極めるために。

佐藤と幸村は水泳の件に恩を感じているのか知らないけど普通に俺の近くにいつのまにかいるようになっていた。いや。本当についでだったから恩を感じるとかそういうのは本当にやめて欲しいんだけど。というよりも罪悪感があるし。

それと時々だけど高円寺が俺と昼飯を取る？いや将来の高円寺コンツェルンに勧誘を受けている。

まぁ受ける気はさらさらないのだが。

「……」

俺はただ真剣にノートを取る。もはや俺が出し続けていたヒントは終わり。残りのピースを埋めるために必要なのはあと一つに迫っていた。

そして授業が終わると一回肩をなでおろし体を伸ばす。

授業っていうのは明らかに面白くないものだ。俺自身嫌というほど予習で慣れており、ただのノートに書き写す時間でしかない。

「……う～ん。やっぱり明確なサインは今の所ないなぁ。」

「何が明確なサインはないの？」

「……って櫛田か。珍しいなこっちに来るなんて。」

「あはは。ちょっとね。最近佐藤さんや松下さんがそっちのグループに入っちゃったから軽井沢さんの機嫌が悪くて。」

「ふ～ん。嫌味を言いに来たのか？」

「ううん。ただちょっと水泳の時間からクラスの雰囲気が変になっちゃったように感じて。」

「そりゃそうだろうな。俺が意図して変えたんだから。」

するとその言葉に櫛田は絶句する。クラスのざわめきを全て止まり俺の方に視線が集まる

「どうして？」

「簡単にいうなら意識改革とヒントだな、あいにくこの学校は実力主義だ。すでにこの三週間で他クラスと差がついているしな。」

「どういうこと？」

「それはすぐに答えを出すよ。さすがにこれ以上やけどを広げさせるわけにはいかないしな。」

その言葉を聞きながら櫛田だけではなく他の人も言葉の意味を理解し始めたのだろう。さらにもっと不安にさせるようなことを言おうか。
「そうそう。遅刻や授業中の私語や携帯を触ったことは注意は先生たちは叱らなかったけど先生は何か手元に書いていたからな。先生たちはもしかしたら俺たちの授業態度の問題で減点対象にされていることは確かだぞ。あれほど注意したのに俺以外誰も注意しないしやめなかった。というよりもなんでこれくらいのことを注意しないといけなかったんだよ。小学生でもできることをお前らはやらなかったんだ。ぶっちゃけ自業自得だろ。」
「っ！」
クラス中がざわざわと騒ぎ出す。もはやそれは隠しようのないものであったのだ。
すると3時間目のチャイムがなる。授業は日本史。オレたちDクラスの担任、茶柱先生が授業担当となっている。
「なんだ騒がしいな。静かにしろー。今日はちょっとだけ真面目に授業を受けて貰うぞ」
「どういう意味っすか、佐枝ちゃんセンセー」
「月末に近いからな、今から小テストを行う。後ろに配ってくれ」
あくまでも事務的に、茶柱先生は一番前の生徒たちにプリントを配っていく。前の生徒から受け取り確認すると、主要五科目の問題が載った、如何にもな小テストだった。
「えぇ～聞いてないよ～。ずる～い」
「今回の小テストはあくまでも今後の参考用だ。成績表には一切反映されることがない。だから安心して取り組め。ああ……、カンニングだけはするなよ？　その場合は問答無用で退学処分とするからな。まあ、そんなバカな行為をする生徒が居るとは思ってないが」
「先生質問いいですか？」
「うん？大江どうした？」
俺が手をあげていることに全員が少し怯えている。ミホと高円寺だけが面白そうに笑っているのだが。それじゃあネタバラシ。最後

のとどめの発言と行こうか。
「成績表には一切反映されることはないと言いましたがこの試験はクラスのポイント。以後そのポイントについてはクラスポイントといいます。今回の試験にクラスポイントに反映されると見てよろしいでしょうか？」
すると茶柱先生は少し笑顔になり値札を調べるかのように俺をみる
そして茶柱先生からクラスメイトにとって絶望の言葉が発せられる。
「あぁ。お前の言うところのクラスポイントには反映される。」
「わかりました。ありがとうございます。」
俺はニコッと笑うとクラスからすでに一歩飛び出したことを宣言していたものだった。クラスのみんなは動揺を隠せないようだった。
しかし試験のこともあってか真剣に受け始める。
試験問題は計２０問。それを俺は３０分くらいで全部の問題を解き終え目を閉じる。
最初の一発はうまくいったようだ。それなら第二フェイズに移行するとするか。

昼休憩俺はクラスに召集をかけた。即ち今回の件の説明をするということだ。
これはまず簡単にリスクを負う問題が高く、俺自身が孤立する可能性もある。
それでもこの辺りで攻めないと面白くない。
この行為を無謀と捉えるのもいいだろう。
昼休みの時間丸ごと使うと言ってあるので俺は先に昼食を買いにいかせ、俺は先にミホが作った弁当（無料）を食べる。
こう言った時友達というのは本当にありがたいものである。困ったときは協力し合いお互いにパートナーとして認め合っていたからだ。
するとしばらくたってなぜか担任の茶柱先生や他の先生まで来て

いた。そのことには驚きを隠せなかったが色々使い道はありそうだ。
「それじゃあ全員揃ったな。それじゃあ解説を始めるぞ。」
俺は教壇に上がり全員を見下ろす。そして黒板にプライベートポイントとクラスポイントと書かれたものがあった
「まず。最初にプライペートポイントについてだな。これは全員が知っている通りここでは金銭として使うという認識があったのだろう。まぁ実際金銭としても使えるしその認識は間違っていないだろう。でも俺の認識は金銭ではなく自分の価値であると考えているんだよ。」
「どういうこと？」
「先生は言っていただろう？『当校では実力で生徒を測る。倍率が高い高校入試をクリアしてみせたお前たちにはそれだけの価値があるということだ。』即ちその価値がなくなればプライベートポイントは失われていく。先生は毎月の振込日と今現在振り込まれる金額しか言わなかっただからな。すぐにプライペートポイントが変動すると気づいたよ。」
すると全員が何故言わなかったのかと言いたげだったが俺は無視して次のクラスポイントを指差す
「そして次にクラスポイント。これは俺は最初は気づいてなかったけどミホのおかげで気づくことができたんだよ。よくよく考えたらこの学校は生徒を実力で測るって言っていたのに対しクラス替えがないのがおかしいんだよ。実力がある人間とそうではない人間。普通なら分けるべきだろうしな。いや分けてあったというべきか。俺が知る限りＡクラスは三日後には二人の先導者が出ていた。」
すると全員が黙り込む。言葉もでないのだろう。それを無視して俺はミホに頼んだ情報収集の結果を告げていく。
「そしてＢクラスも入学して５日後Ｃクラスも入学してから二週間後には気づいた人がいるのだろう。一気に先導者が現れ統率者が生まれた。だから俺はこれ以上やけどを負うわけにはいかないと言ったんだ。」
即ち俺がこれからクラスの先導者として立つということを宣言し

ていることと変わりはない。
「話を戻す。この一言によって俺たちはクラス対抗も視野に入れ詮索を始めた。そしてまず真っ先にこのことをクラスに話すかを考えたんだよ。」
「そうだよ。なんで俺たちに話さなかったんだよ。」
　すると教室全体が批判の声を浴びせてくる。いや。主に山内や池軽井沢など話していた人間や散財しすぎていた人たちばっかだ。
　少しの間俺はただ静観する。今のうちに批判を殺到してこないとこれからやることに色々と支障がでてくる。
　ぶっちゃけ俺が怒りたいくらいだ。こんなこと当たり前のことを当たり前にできない人間にどうして構わなければならないのか。そう思ってしまうくらいこのクラスの惨状は酷いものだった。そして数分ずっと黙っているとすると少しずつであるが収まってくる。
「……そろそろいいか？」
　全員の声が黙るまで俺がずっと待っていたことにさっきまで批判していた生徒は口をつぐむ。
「言っとくけどここまでやったのはお前らの自業自得にすぎない。言っただろ俺は何度もヒントを出し続けていた。高円寺なんかはたった一言で気づいたぞ。プライベートポイントに変化があるってな」
　俺は冷たい口調でそう告げる。そして俺は続けていった。
「とりあえず言わなかった理由はこのクラスは絶対に防衛できないと見たからだ。周りのことを考えない会話。他人のことを考えない授業態度。そんな生徒に注意をしないクラスメイト。授業は欠席するは遅刻はするわ。……なんでそんな当たり前のことができないんだ？当たり前のことさえできないのに他のことができるわけないだろう。」
　冷たい視線を向ける。すると全員が居心地が悪いのか視線を下にそらす。
「確かにクラスポイントが減ったのは俺たちにも責任がある。でもな大半はお前らのせいだぞ。よくよく考えてみろよ。なんで十万と大

金を手にいれることに不自然を覚えなかったのか？なんでその疑問を疑問にしておくんだ？」
そして俺は完全的に突き放す言葉を告げる
「多分先生たちや他のクラスは俺たちのことをこう思っているだろうよ。本当に愚かだなってな。」
クラス全員が静まり返る。当たり前はこれで全てのピースが埋まったのだろう。
「だから俺とミホは独自にプライベートポイントを手にいれる手段を模索した。そのうち俺は学校の仕組みに気づいたことにスポットを当てるためプライベートポイントを使った賭け事、そしてミホは俺が出資して自分の寮でレストランを作ったこと。ミホがレストランをやっていることは知っている人が多いよな？」
実際何人かのクラスメイトは食べに来たことがあるのだ。
それ自身隠すことではないことなんで全員頷く。
「その時によく聞いたよ。よくDクラスがこんな案を持ち出したってな。当たり前だ。前例のないことを俺とミホはやっているんだから。学校内での企業は未だ前例がないらしい。一応売上の一部を学校に寄付していることを条件に開いているけどそれでも好調だよ。今俺とミホは共同でプライベートポイントを使っているしな。今現在俺たちが所有するプライベートポイントは百万を超えたぞ。」
「ひゃ。」
それはこのひと月で一人当たり五十万ポイント増やしたことと同意義になっている。そしてこのことが何を意味をしているか。
それは経済面で俺とミホ頼みにならざるを得ないことになるってことだ。今、クラスのプライベートポイント半分は俺たちが持っていることになる。
そしてそれは他のクラスにも知れ渡っている。Dクラスで真っ先にSシステムに気付きそれでいてクラスに進言しなかった。いや恐らく相手にならないので自分から最下位になる選択をした俺とミホを警戒する人は恐らくいるはずだ。
「……まぁこのくらいか。とりあえずは今日はここまで。残りのこと

については月始めの方がやりやすいからな。……茶柱先生５月１日の朝のホームルームの時間を買います。いくらになりますか？」
「……本当にお前は恐ろしい生徒だよ。あぁ。授業中ではなく朝のホームルームの時間であるとすれば…五万くらいか？」
「それなら今払います。その時に今後の展望。そして俺たちが所有するプライベートポイントの使い道について説明する。異論があるならその時に聞く。以上解散。」
と俺はそう言い終わるとため息を吐く。
そして須藤の様子を見ると少し動揺していたが……どうやら落ち着いている。
……ちゃんということは守っているな。
なんとかなるか。
俺はそうやってぐったりと机に体を預けた。
そしてこの瞬間クラスの立ち位置を一気に覆し俺はトップに立ったのであった。

ポイントの使い道

人の夢は!!!　終わらねェ!!!!
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　ｂｙマーシャル・Ｄ・ティーチ

１２００ｐｔ

５月の始めポイントを俺に全部預けたミホのプライベートポイント欄にはこう記されていた。

「……想定していたよりも多かったな。」

「そうだね。ポイントゼロも覚悟してたけど。……少しだけポイントを取れただけまだましじゃない？」

　これでポイントゼロだったらよかったんだけど……。まぁこれだけで一ヶ月もつかと言われたらまぁ持つか。無料の食品は結構あるし娯楽用品も基本的に残っているだろうしな。

「…でも出費かなり多くない？大丈夫なの？」

「……ぎりぎりに抑えて七十万ポイント。……結局これからもっと増えるとなると流石にきつい。最悪チェスも解禁するし。……でもやっぱり運営厳しいな。クラス用の緊急用の金庫も作りたいしこりゃ節約生活かな当分の間は。」

　須藤の支援やこれからやろうとしていることはかなりポイントを使うことになる。さらに賭け事のお金は残しておきたいし。

「……いくらポイントがあっても足りないなこれ。」

「うん。ちょっと厳しい。減額してこの金額は流石に多すぎる。」

「こりゃダメだ。完全に稼がないと話にならない。プライベートポイントを稼ぐ機会があればいいんだけど。恐らく今はチュートリアルみたいなものだ。恐らくだけど試験がない。」

　俺は小さくため息をつく。いや試験はあるのだがそれは俺らが運営する試験であり俺たちの金銭には入らない。

「……きっつ。」

「でもこれが成功すればかなり支持は集められると思う。特に部活をやっている人は平田くん以外は全員の支持を集めるんじゃない？」

「やっぱり平田だよなぁ。問題は。」

よくも悪くも人望がある平田は俺と対立関係にあたる。そして今日は色々準備をしないといけないし
「破産が先か軌道にのるのが先か。とりあえず先学校いくかぁ。」
「……本当に大変になりそうだね。」
「今回の目標は徹底的に要らない駒を見極めることだからな。無能な味方ほど怖いものはないし。」
俺はそうしながら少しだけ息を吐く。
「……さてと。行くか。」
「うん。それじゃあ第二幕といこうか。革命を起こそうか。」
「起こすかどうかはクラスメイト次第だけどな。」
「こっちもこっちで苦労したんだけど……まぁいいけど。」
俺とミホは学校に向かう。
説明用の資料と今後の課題について説明するために

学校につき茶柱先生に連絡事項を聞き終えると……流石に俺も声を失った
それはクラスポイントの所有点数であるである。
Ｄクラスは１２ｐｔ。Ｃクラスが４９０。そしてＢクラスが８５０。Ａクラスが９４０。明らかにＢとＡが抜き出ている。
流石にこれは予想してなかったな。
先導者がいると思えば楽だけどこの調子じゃ本当に追いつけない。
「……せめて一年の間に３００。いや４００ポイントは欲しいんだけどなぁ。てか一ポイント１００円計算か。」
「１２００円は流石に普通の人なら厳しいかも。私なら普通に一週間は普通だけど。」
「……知り合いに一人可能な人物がいるから否定できないな。」
そいつの貧乏ぶりもそういえばこいつと似ているところがあるんだけどなぁ。
……やっぱりあいつのいるＢクラスは流石に手強いって感じか。
「……はぁ。きっちぃ。」
「……僕がいうのもなんだけ僕も少し手伝おうか？」

「いや。軌道にのるまではレストランの方に専念して欲しい。流石に今は少しでも安定した財源がもげるとなると。」
「……あぁ、破産まっしぐらだね。」
俺たちはため息を吐く。
そして教室に入るとするとざわざわとし始めている生徒たちがいた。
「おい。なんで幸村は６２００ｐｔ入っているんだよ!!」
「はぁ?須藤お前４５２００ｐｔも入っていたのか?」
「なんで小野寺さんは３２２００ｐｔ入っているの?」
早速効果が出始めているな。教室内がざわざわと騒がしくなっている
ついでに言うならばもちろん俺が仕掛けたことだ。それがクラスのポイント差に反映されている。
俺たちが教室に入った途端視線が集まる。
「ちょっとどう言うことよ!!ポイントって全員同じじゃないの?」
「はいはい。その理由については後々に説明するから。」
「っ!!やっぱりあなた達のせいなの?」
と俺を睨む篠原。だけどもこれは明確な理由があった。
「あぁ。というよりも部活動をやっているクラスメイトに関しては部活動で使った費用の半額を俺たちが負担しただけだ。」
「……えっ?」
するとクラス全員が黙りこんでしまう。
「……どういうことだい?」
「本当は全額払いたかったんだけど流石に僕たちでもまかなえなかった。特に運動部はユニフォームやかさむってナオが言っていたから。」
「まぁ簡単にいうならばこれから俺たちは部活動関係は半額負担することにした。部活動でいい成績をとるとプライベートポイントやクラスポイントが手に入る可能性があるらしいからな。」
「「「は?」」」
「ついでにその部活動で手に入れたプライベートポイントは自由に

使ってくれて構わない。俺たちは一切関与しないんで。」
　一応４月が唯一の部活動申し込み期間になっている。せっかくのプライベートポイントを手に入る可能性が途切れてしまったからだろう
「これに関しては俺が情報を抑えていたからな。というよりも元々部活動で活躍しなかったら、マイナスに加担するパターンもあったってわけ。だから適当な部活に入ること自体がクラスの不利益に繋がる。」
「だからこそ本気で部活をするかどうかを見極めなければいけなかった。ポイント目当てで入部して減点くらって退部する。これがクラスの不利益つながるし私たちがポイントをはらう価値はないから。」
　すると数名の生徒はどうやら納得したらしいが数名は納得できないらしい。
「まぁ朝のホームルームはまだ早いけどほとんどクラスメイトが集まったし今回のポイントと今後の方針について説明する。まだまだ言いたいことは多くあるし資料も配らないといけないからな。」
「とりあえず渡すから全員これ読んでね。」
　と全員に資料を渡していくミホ。……そしてその数分後全員が青ざめていく
　だってそのはず。そこには数百万のポイントの決算表とその内訳を俺がコンピューターに内訳を出し生徒会長である堀北学の版が押されていたからだ。
「ちょっと待って。あなたどれくらいの金額を私たちに使ったの？」
　その声は後方の座席である堀北からの声だった。堀北は今回一万五千ポイントを別に渡している。
　俺は少し苦笑し今回使った支出の合計金額を答えた
「約七十万ポイント。」
「っ!!」
　およそ半分のポイントを使った大改革に全員がざわめいている。
　というよりもかなり金銭的に高額であり、恐らく、今この中で一番高額な取引であるということがわかっていた

「今回のポイントの決め手になったのは抜き打ちテストと水泳の競泳だ。とりあえず抜き打ちテストの結果から張り出すぞ。」
　と俺はその成績を見せる。てか改めて見るとひどい成績だな。平均７０は欲しいのに６５点程度しか取れていない。
「平均点は６４，２。平均を二分して小数点を四捨五入した数が赤点のラインになる。中間や期末では赤点が１教科でもあったら即退学。っていう学校のルールだ。」
「「はあああああああ――!?」」
　六人の赤点候補の生徒が驚愕の悲鳴を上げた。
　三十一点の菊池という生徒の上で、赤線を引く。つまり彼以下の七人は退学になっていたということ
　そこである人は唯一動じなかった。普通なら真っ先に動じるようだと思っていたたった一人の人物が
　それに気づいた池がその人に発言する
「おい。須藤はこのままでいいのかよ。このままだったら俺ら赤点だぞ!!」
「あぁ。だから最近毎日俺はナオと一緒に勉強をしているからな。」
「……は?」
　そう須藤の勉強する発言に池や山内は固まる。
「須藤はバスケのプロになりたいって言っていたからな。俺もバスケをやっていたから分かることだけどバスケって基本的に大学を卒業してプロになる人が結構多いんだよ。もちろん。高校からプロになるって人もいるけど。スカウトとかは大学生中心で回ることが多い。基本的に大学のバスケットボールは高校の数倍はレベルがあがる。だから俺がバスケで食っていきたいんだったら大学でバスケを学ぶべきだと進言したんだよ。バスケ部の先輩にも須藤は注目されているしすでに一軍の練習にも参加している。」
　すると全員が須藤の方を見る
　少し照れくさそうだったがそれでも俺は続けた
「言っとくけど須藤はこのクラスでは群を抜いて運動神経がいい。ある契約を結んでからは授業もサボってないしまともに授業を受け始

めた。……言っとくけどクラスが上に上がるのなら欠けたらかなり損害になる。それだけの価値が須藤にはあるんだよ。」
俺は断言する。須藤自身それには驚いたのか俺の方をじっと見つめていた。
「そしてこの表を見てくれ。」
と俺は表を黒板にはりそれを全体に見渡せるようになった
「この学校は実力によってクラスが割り当てられていることは話したよな。優秀なメンバーが多いのがＡクラスそれからＢ、Ｃ、Ｄという順番に配属されるようになっている。もしクラスポイントがＣを抜かしたならＣクラスに俺たちはなる。即ちＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄという順番に優秀なクラスってことになる。そしてほとんどクラスメイトがこの学校を志望したのは、高い進学率、就職率を誇る噂を聞いたからだろう。事実、その噂は間違っていない。そして当校は、生徒が望む未来を叶えると、そう謳っている。だが……世の中そんなに上手くいくはずがない。――Ａクラスだけが、その恩恵を得られる。それ以外の生徒の将来は確約出来ないらしい。」
「そんな話は聞いていないぞ！」
「つーかこれに関しては俺に言われても困る。……まぁ入学前からそんなに美味しい話はないと思うし怪しいとは思っていたんだけど。」
元々学校側の規則だ。これを変えるのには恐らく何千万との大金がいる
「今回配られたポイントは以下の通りだ。まずは抜き打ちテストについては１００点の俺がトップ。本来なら俺が一万ｐｔもらうはずなんだけどなし。これは水泳の競泳と同じ値段設定にしてある。だから小野寺のポイントは水泳部の料金プラス１１２００ｐｔが入っているはずだ。」
「えっ？本当に？」
「あぁ。次にわかりやすいのは堀北と高円寺だろう。学力、運動力で高い数値を全てにおいて二位という成績を収めてくれた。この学級では二位に入ったものには５千ポイントを普及した。だから１１２００ｐｔ支給されている。」

「ええ。」
「あぁ。間違いないさ大江ボーイ。」
　そして俺は今度は幸村、須藤、山本を見る
「そして幸村は通常は６２００ｐｔ水泳で三位に入った須藤と山本には２２００ｐｔが支給してあるはずだ。そして今回に限って来月俺が先導者になるけど、これからクラスではＭＶＰ投票というものを月終わりにやろうと思っている。」
「ＭＶＰ投票？」
「あぁ。クラス投票で先導者を決めてもらう。先導者はこのクラスのリーダーシップを保つためのものでありこのクラスの発言権を持つ即ち選挙みたいなものだ。投票し一番多かった男子と女子が先導者。そして２番目に入った生徒がその補助として入ってもらう。」
　それは俺は決して独裁をしないという現れでもあった。
「そしてもちろんであるがこれもプライベートポイントを支給する。クラス投票にて一位だった人には二万ポイント。二番目に入る生徒には一万ポイントを支給する。」
「……お前まじかよ。」
　呆気にとられている池や山内。さすがにこれくらいのことは分かるのであろう。
　明らかに俺の利点がなさすぎることを
「ついでに先生には中間や大型のテストがない場合は月終わりに抜き打ちでテストを行うように頼んである。これは平常での学力がみたいからで一夜漬けなどはできない。即ち日頃からちゃんと予習復習をこなしているか。その応用問題ができているかを見極めるためだ。」
「……なるほど。」
「そして体育についても同じことだ。体育の教師に協力してもらって体育の試験を毎月行う。運動や勉強の実力差がはっきりするだろうしな。そして中間テスト。これは各教科の上位一位に五千ｐｔ。総合点ではさっきの通りの金銭を発生させる。……もし中間テストの攻略法を見つけたやつには三万ｐｔを支給する。」

「っ!!」
「言っとくけど俺は実力あるものは優遇するしそれなりの対価を払う。それはクラスのためであり、俺たちがAクラスに上がるためには必要のことだからだ。……だから他のクラスに寝返るなんてもってのほかだけど。クラス内での争い。また退学を仕向けるなどという行為は禁止する。……当然のことだけど、裏切り者にはとことん容赦はしないから。」
そしてふぅと一息入れ
「今回補助には平田と櫛田に入ってもらう。ポイントは投票ではないから入れないけど今回は俺の独断で決めた。この二人は人望が厚く恐らくみんなにとっても信用がおける人物だからだ。反論はあるか？」
首を横に振ったり賛成という言葉がクラス内から聞こえてくる
「それじゃあ解散。それと赤点組は後々対策を考える。以上だ。」
と俺がいうと全員がわぁっと歓声が上がる。どうやら最初の手応えはうまくいったらしい。
しかしこの制度の本格的な意味を理解している人は恐らく誰もいないであろう。
俺は小さくため息を吐く。これからのことを考えるとプライベートポイントをもっと稼ぐ方法を考えなければならなかった。

櫛田の才能

努力は結果のための過程に過ぎません。いくら努力が尊い行動であっても、過程自体を誇るようになっては本末転倒なのです。

バカとテストと召喚獣　ｂｙ　吉井怜

授業が終わると早速平田が行動し始める

「みんな放課後、ポイントをどのように増やしていけば良いのか考える会議を開きたいと考えているんだ。できるだけみんなに参加してもらいたいと思っているんだけど。」

俺はそれを無視して教室からでる。当たり前だ。普段通りの生活をしたところで意味がないことだと気づいているからだ

俺は外に出るとするとそこにはもう一人意味がないと思ったのかそれともＤクラスに配属されたのを抗議するのか

「……どっちにしろ関係ないか。」

俺は今日もポイントを稼ぐために向かおうとすると結構離脱者は多いらしいのか教室から出てくる生徒も少なくない

須藤に長谷部や佐倉などか？

あのあたりはコミュニケーション不足。いや馴れ合いを拒むって言ったところだ。

というよりも佐倉に限っては視線を集めるのを拒んでいると言った方がいいか？

何か表に出る仕事でもやっていたのか？

……やっぱり諜報向けの人脈が一人欲しいところだな。

人混みにある程度は紛れることができるのが俺であるのだが情報を集める行為は正直苦手だ。

ある程度信頼できる人だと気づいたらとことん安心して自分の意見を言えるんだけど。ミホはちょっと何を考えているのか正直分からないからな。

一人の友達としては面白いけどお互いに踏み込むラインは分かっているのであろう。家に泊まるときも狭い量をさらに半分にしてい

るからな。
つまり策略に向いていない動きやすい交友関係に優れた奴が欲しい
そう考えると真っ先に出てくるのが櫛田桔梗にあたる。
人間自分の闇を抱えていない人はいない。恐らく今回クラスでハイスペックなのは平田、俺、高円寺、堀北、櫛田にあたる。そして先導者になろうと
この中で俺が味方につけているのは高円寺だ。
あいつには基本的に自由にさせることを俺は決めていてそっちの方が高円寺は生きる人間であることは確かだろう。それを高円寺にはちゃんと伝えてある。あいつに嘘は一番やったらいけない行為だ。それならば利益を与えて勝手に動き回る方が十分生きることになる。これには高円寺も驚いていたし高円寺のやろうとしているプライベートポイントの所得方法について言い当てそれを黙認するとした時に高円寺は俺に味方することを約束してくれた。契約を結んだらおそらく高円寺はまた中立の立場になると考えたため高円寺は契約ではなく約束とするだけにとどまっている。そして逆に高円寺は俺がトップに立っているとき利点になることを確信している
そして堀北も運動や勉学に関しては圧倒的なステータスを誇っているがさすがに協調性がなさすぎる。一人で解決するなんて以ての外誰かに頼ることをしない人間であることは確かだ。
そして平田と櫛田は交友関係、勉学、身体能力も問題なしだ。……ただ平田は壊れやすい。明らかにみんな仲良くって形にとらわれ過ぎている。俺とは絶対に合わないことは分かりきっていた。
だから自然と櫛田に協力関係を結びたいと考えている。来月のＭＶＰは恐らく平田と櫛田になるだろう。だから片方だけでも最低でも少し仲がいい関係になっておきたい。
しかし櫛田の交渉カードが見つからないんだよなぁ。あいつかなりの高スペックで中々素を見せない。
とりあえず探りをいれてみるしかないかなぁ。
そんなことを考えながら入部した麻雀部へと向かうのであった。

「あ～儲けた儲けた。」
と麻雀部の先輩たちに奢ってもらった帰り道1日で数百万ポイント勝った俺がホクホクしながら帰路に帰っていた。
入部した場合、先輩次第で掛け金が大きくできるらしく今日は最初から１０００点１００００ポイントで賭けているのもあり、一回１２万ほど負けたもののそれでも１００万近く稼ぎ、早速6月に行われる夏の大会に団体と個人で出させてもらうことになったのだ。まぁ先輩曰く一番強い人が大会にでないのはおかしいという判断だったらしい。ついでにこの部去年団体戦全国制覇を達成した部活であり。ポイントを使った賭け事をしているせいか。一人一人のレベルが圧倒的に高いということを俺は始めて知った。
……次からはちゃんと対戦レベルのことは前準備していかなければならないな。一応麻雀は接待に十分役立つからといわれ習ったのが幸いした。
ついでに一年の入部者は俺含めて三人。ＡとＣから一人ずつだ。
一年同士で賭け事なしで打ち合ったんだけど基本Ｃの松本という女子の愚痴を聞くことに精一杯だった。圧倒的にボコボコにしてたんだけどどうやら龍園という人が支配をしたらしく独裁政治をしいているらしい。仕方なく付き従っている感じか。
そして俺のプライベートポイントは今は１５０万ほどにあがり、本来なら月一で賭けるのがこの部の特徴らしい。
先輩に聞いたところプライベートポイントを使った娯楽は多くありテレビとインターネットに規制がかかっているこの学校ではこういった方法でストレス発散をしているのだとか。
そう考えると娯楽が少ないのか？
一応最低限のものはあるのだけれど。それでも娯楽は正直男子にとっては少ないよな？
……こんど他のクラスと情報を交換してみるか。
と色々考えながら歩いていると
「本当にムカつく。」

……とどこか聞いたことのある声が聞こえてきた
まぁあんまり聞かない方がいいよなと思い遠回りしようとしたのだが
……ここどこだ？
いつのまにかオートパイロット状態になっていたらしく海岸線沿いに来ていた。つーかこれ完全にやっちゃったよな。
完全に迷子だ。
仕方がないので俺はその声がした方へ向かう。
ちょうどいいや。ついでに契約もしておいた方が良さそうだな。
俺はボイスレコーダーとスマホのカメラに改良型のボールペン式のカメラの電源を付ける。
「櫛田。こんなところでストレス発散すんな。俺みたいに通行人がいたらどうするんだよ。」
「っ!!」
すると櫛田が慌てたようにこっちを見る
「えっ？なっ!!」
「……つーか俺も混ぜろ。くだらない無能共に愛想振りまくの大変なんだぞ。何であんな使い物にならない奴らのためにプライペートポイントを支払わなければならないんだぞ。」
「っ！」
「本当使えない。まだ須藤なんかは価値があるけど夢も協調力もない奴のために色々考えないといけないんだよ。当たり前のことをやらなくて何が被害者面しているんだよ。」
俺が同調したことによって櫛田もその意図が分かったんだろう。
クスッと笑い
「本当それ。男共は目つきがキモい下心見え見えでマジウザいつーの。」
とお互いにクラスの悪口を言い合う。秘密の共有。それがおそらく櫛田をこっち側に付かせる唯一の手だろう。
そして数十分悪口を言い終え俺は櫛田にボイスレコーダーを投げる

「っ！」
「これで俺の秘密を握ったってわけだ。そっち側の方が櫛田は安心できるだろ？」
「……はぁ。本当に大江くんは人の扱いが上手いよね？」
「こう見えても昔全中三連覇した時のキャプテンだぞ。当然のごとく櫛田みたいなやつもいたし爆弾処理をしないといけなかった時だってある。」
「爆弾って。」
　少し引いているのだが俺はさらにせめてみる
「……お前のＤクラス配属の理由って本性がバレたからか？それとも持っていた情報をばらまいていたからか？」
　俺はかなり直球で聞いてみる。それは櫛田の深いところを抉っているようなものだった
「そういう大江君は何でＤクラス配属なの？明らかにみんなよりも優れているって感じだったけど。」
「俺は第一希望がここじゃなかったんだよ。というよりもさすがに怪しすぎた。面接の時にここのことを食虫植物って言ったりここの入試の記入欄を全て英語で回答してたからな。」
「……それ結構問題だよね？」
「別に。俺から見たらこの学校の方が性格悪いとしか言いようがないんだけどな。……やっていることはただの詐欺と同じことだ。」
　事実ここの制度は法律スレスレに近い。ここに入れば理想の進路にいける。これは噂に留めていることだが恐らく発信源はこの学校と国家であるだろう。
「……それって。」
「あぁ。ここは恐らく最初から俺たちはこの学校に入学されるように決められていたんだよ。よくよく考えたら学校の先生から妙に進められた形跡がある。すなわち入試などは全部ダミーで最初から決められていたんだよ。クラスも全てな。」
　本当に合格通知が出てきた時一瞬何で合格してのか不思議だった。そして考えた結果がこれだ

「本当にクソッタレな学校だよここは。」
「それだけ分かっていて何で入学したの？」
「両親から言われたのと家から逃げるためかな。両親の働いている会社で働いてほしいんだとさ。俺、小さいときから投資とか色々やっていたから。」
「投資っていくらくらい稼いだの？」
「億は超えてる。絶対に失敗しないゲーム会社やブレイクしそうなスポーツ選手の契約しているスポーツメイカーを思いっきり株式を買い込んでいたからな。結構遊び感覚で色々やってたらすごい儲けがでた。」
　だから両親は俺のことを物凄く買っている傾向がある。元々エリート思考が高いし俺にかなり勉強を押し付けられたのもあるけど
「……本当規格外だね。はぁ。……まぁ見られたのが大江くんだったのは良かったかな。大江くんは多分私みたいな人間がいた時は自分の弱みを話すタイプだよね？ううん。違う。私みたいな人しか信用できないんじゃないかな？」
　即ち自分の本当の姿を見せた人のみ信用できるというもの。それも確かにあるのだけれど
「…いや。一応基本的に上辺だけじゃない友達は基本的にこっちを見せているぞ。そう考えるとお前と同じだよ。基本的に自分が認めてもらえるように動く。おそらく理由は違うけど承認欲求で動くタイプだろ？」
「……やっぱり分かる？ううん。お互いに分かっちゃったんだよね。」
「そうだな。ただ異なるのはそんな自分が好きか嫌いか。それだけだろ？」
　そんな自分が大っ嫌いな俺。反対に自分に自信を持っている櫛田。
　だから分かる。こいつも分かっている
　それはお互いに限界があることを。
「……そうだね。それじゃあ私のことも少し話そうかな。」
「あぁ。その前に。」
　俺は軽く周囲を見渡す。そして誰もいないことを再確認する。

「ん。大丈夫そうだな。こう言った話をするときはできるだけ周辺の警戒をしないとまずいだろ。」
「なんか大江君といると私の上位互換みたいで嫌なんだけど。」
「上位互換ではないしタイプも全く違うからな。俺は情報収集とか全く向いてない。どちらかといえば人を操る側だろうな。計画を立ててそれを命令する。逆にお前は誰にでも近づけるってかなりすげぇぞ。俺はそういうことよりも結果で語るタイプだからな。お前みたいに深い仲になるのってほとんどないんだよなぁ。まぁ大体見えてきた。……お前の破滅原因はおそらくインターネットでのストレス発散か。」
ほぼ確信に近かった。話しているときもそうだけど警戒心が低すぎる。
俺に見られたのも外で声をあげていたからに近い。寮は防音対策はされているのだがそれでは不安だったのだろう。おそらくここは本来ならばインターネット内で知らない誰かに打ち明けるっていうのが櫛田のストレス発散方法だったのだろう
「うん。正解。ブログでクラスメイトのありのままの真実を書いていたの。もちろん匿名だけど。」
「それがクラスメイトにバレて関係が険悪にか。ログが残るインターネットはさすがに名前を変えてもありのままの真実を書かれたらさすがにバレるな。」
「本当に迂闊だったよ。……ううん今回の件もそう。私はかなり爪が甘いって痛感させられる。元々小学校のころは神童とか天才って言われていたんだ。でもやっぱり私みたいな凡人は君みたいな人には劣ってしまう。本当の天才って大江くんみたいな人のことをいうんだよね。」
「……はぁ。櫛田。お前気づいてなかったのか？お前自身の才能のこと。」
「へ？」
俺は本当に気づいていないのかと小さくため息を吐く。
こいつ普段から自分の才能を使っているから気がついているのか

と思ったんだけど……
　だから俺は櫛田の顔を見ながら断言してやる。
「お前の才能は悪い意味でいうのであれば人を騙すこと。いい意味でいうのであれば演技力だ。言っとくけど俺も正直裏の顔は全く気付かなかったし、誰もが騙されている。即ち自然な笑顔や不自然のない笑顔で騙し続けているんだろうが。」
「っ！」
「その演技力に関してはお前は女優に匹敵。いやそれ以上なんだよ。お前は天才的に理想の自分を演じることが上手いんだ。」
　そう櫛田の強みはその情報収集力だと思っていたんだが、今回の件で櫛田の才能は演技力に特化していると感じられた。全員を騙せるほどの演技力はおそらくこの学校や社会にでてもそう見られない
「お前の悪い噂なんか聞いたことがない。クラスでたった一ヶ月でこれだけの信用を得たんだ。来月からのＭＶＰ投票で女子の部門でお前が一位から外れることなんてありえないんだよ。」
「演技力……。それが私の才能？」
「あぁ。自信を持っていえる。その分野に置いては櫛田は頂点に立てるだけの才能を持っている。」
　正直櫛田が演劇の道に進んだとすれば１００％成功する確信できるくらいの演技力をもっている。人間腹黒いところは俺がちゃんと発散させてやれば櫛田はこれ以上に才能を開花させる可能性がある。
　そうなった場合こいつの価値はさらにもう段階上に上がる。
「……本当に？」
「本当だ。」
「そっか。」
　すると普段の笑顔ではなく自然と頬が緩む櫛田。
　その笑顔はまるで新しいおもちゃを与えられた子供のようだった。
　櫛田はさっき握ったボイスレコーダーを投げ返してきたのでそれを受け取る
「いいのか？」
「うん。というよりも必要なくなったから。……ううん。違う。私は

大江くんについていく。大江くんが退学するのであれば私も退学するし。もう堀北とかどうでもいい。」
「……流石にそこまではしなくていいんだけど。つーか重い重い。」
　というよりも櫛田と堀北って関係あるのか？……まぁ恐らく昔のことについて知っているんだろう
「……てかそんなに嬉しかったのかよ。」
「うん。だって皆私の外面しかみてくれないんだもん。中学校の奴らなんか私の裏側を見ただけで全員が怯えてたし。……でも私の本当の姿を見ても大江くんは引かないんだ。」
「何で？そんなもん気にしねぇよ。人には裏があるのが当たり前。完璧超人なんか存在しない。俺だって色々弱点があるしな。」
「そっか。それを聞いて一安心かな。」
「……帰るぞ。」
「うん。でもちょっとコンビニ寄っていいかな？少し買いたいものがあるから。」
「付いてくよ。流石に夜遅いし女子一人にさせるわけにはいかないしな。」
　と言いながら隣を歩き始める櫛田と俺
　思っていた以上に深い仲になりそうだと俺は小さく苦笑いするのであった。

中間考査の攻略法

勉強も暗殺も同じことだ。基礎は身につけるほど役に立つ

暗殺教室　ｂｙ烏間惟臣

翌日の朝俺が登校するとすでに学校はザワザワと賑わっていた。

「おはよう。」

「おっ松下おはよう。」

「おはよ～。ナオくん」

「佐藤も一緒か。おはよう。」

とプールの後も交友関係はちゃんと続いており結構いい付き合いが続いている女子二人が俺の机の周りにやってくる

「そういえばナオくん少し落ち着いた？帰り道にカフェでも行かないかな？あの、もし良かったら勉強見てもらえると嬉しいんだけど。」

「ん？別にいいぞ？てかプライペートポイントはあるのか？」

「うん。昨日軽井沢さんから３０００ｐｔ貸し出したけど少し余裕はあるよ？」

「……は？ちょっと待ておい軽井沢にポイントを貸したってまじか？」

俺はそこに食いついた。まぁ予想通りの結末ではあるのだが。

そしてそこを狙い撃とうとしていることは松下の目にも明らかだろう。

「……はぁ。金銭トラブルや恋愛トラブルほど集団の和を乱す行為ってことを感じねぇのかな。あいつの手にいくらくらい渡った？」

「一人２０００～５０００くらいだと思う。ミホちゃん自分の分はあっさり断っていたけど他の佐倉さんや井の頭さんの分払っていたからミホちゃんも金銭的に結構使ったんじゃないかな。」

「……。」

うわぁ。あいつも動き始めたな。

恐らく少数表はあいつがかっさらっていくだろう。あいつは元々大人しい人との相性がいい。

話をよく聞きそして話題も振れる優秀な友達だ。

「……まぁ放置でいいか。カフェくらいなら付き合うよ。俺も勉強会は開こうと思っていたし。」
「そうなの？」
「あぁ昨日部活帰りに櫛田と偶然あって勉強会開いて欲しいって言われたんだよ。一応部活入っているから毎週水曜日は入れないけどな。って篠原お前バレーボール部なんだろ？バレーボール部の費用さっさと払ってくれ。そうしないといくら入金すればいいのかわからないから。」
「あっ。うん。分かった。」
　すると素直に頷く篠原。……つーかあんなに素直に頷かれるとは思わなかった
「やっぱり部活動やっている人には効いているね。」
「ミホおはよう。」
「おはよう。私も参加していい？私自身ちょっと成績は厳しいから。」
「赤点すれすれだったからな。あぁ。もちろんいいぞ。」
　と少しガッツポーズをするミホ。結構不安だったんだろうか。すると須藤もこっちにくる
「悪い。ナオ俺は。」
「部活だろ？別にいい。時間は2時間きっちりと勉強をすればいいから。夜に松下と俺、櫛田主催の部活動をしている人向けに勉強会開くから。そっち側に参加してくれ。場所は近くのファミレスで3時間でどうだ？6時からになるけど。」
「おう。構わないぜ。」
「あの、部活動参加してないけど。私たちも参加できますか？」
「ファミレスの方は基本的に参加は自由だ。あんまり騒ぎすぎると追い出されるからな。」
　といつのまにか俺の周りには女子で囲まれていた。
　つーか須藤がいるからなんだけど女子ばっかりは流石にきついな。
　……そういや。男子の交友については結構狭いよなぁ。俺
　須藤幸村、後は高円寺か。かなり優秀な人材なんだけどなぁ。
　女子については松下は恐らくかなり優秀にあたるそして櫛田もそ

の一人だ。
　それに対し平田派は平田、軽井沢辺りがちょっと不味そうだな。
　しばらくは利権を取れるだろうし最初の攻撃が上手く作用しているのもあるのだが
「おい。席につけ。」
　と茶柱先生が教卓へつく。さて今日も授業に取り組みますか。

「ってことでここはＸ＝５　Ｙ＝３ってなるわけ。」
「なるほど。」
「分からない人がいればノートをコピーして渡すからな。基礎はしっかり身につけろよ。」
　と放課後、俺たちはカフェで２時間ほど勉強した後その後部活動組と合流し、勉強を見ていた。
　カフェの時は俺、松下、佐藤、ミホ、そして井の頭と佐倉がミホ繋がりでやってきて勉強は基本俺と松下が見ていた。
　そして放課後は俺、松下、櫛田、須藤、三宅、篠原、小野寺。平田以外の運動部の参加になった。
「…っていい時間だな。今日はここまで。」
「えっ？少し早くない？まだ２時間半しか経ってないよ？」
「いや。集中力とここの閉店時間の問題だよ。今は８時半だろ？ここは１０時まで。一応場所を貸してくれたからな。一人１０００ｐｔまでなら奢ってやるから好きなもん食べて帰れ。」
「えっ？いいのか？」
「あぁ。少し女子に聞きたいことがあるからな。」
　俺がそう言うと全員が不安そうになる。恐らく勧誘かなんかだと勘違いしているんだろうか？
「軽井沢に貸し出した金額を知りたいんだよ。あいつ結構むしりとっているらしいからな。今は俺が立て替えて来月からのあいつのポイント支給から減らす。金銭的トラブルはトラブルになりやすいからな。」
「そういうこと？それならいいけど。とりあえず私は３０００ｐｔか

な。」
「私は５０００ｐｔかな。」
「……」
　これはさすがにちょっと多すぎるな。まぁそれだけ弱点を作っていることに違いはないのだけど
「……って先注文済ませようか。後からポイント支給するから。」
「う、うん。でもいいの？」
「別に。とりあえずはここのメンバーは篠原以外は節約してきたからな。篠原は返せよ。今回素直に言ったからポイントを貸してやったけど。」
「うっ。ごめん。」
　と篠原は素直に反省しているらしい。一応一万五千は持っていたのだが誰か恐喝をすることはなく俺に借りるという選択をした。一応部活の料金は足りていたらしいが生活費がそうなると厳しいとのことだった。
　注文を済ませると待ち時間部活動の話で盛り上がりながら
　すると疑問に思っていることがあるのか須藤が聞いてくる
「でも、お前ポイントの貸し借りについては黙認しているんだよな？何で軽井沢のがダメなんだ？」
「いや。あいつは多くの人にポイントを借りているのが悪いんだよ。例えば篠原みたいに俺に全額借りるとかだったら俺一人に迷惑をかけるだけ。つーか俺もポイントの貸し借りやクラス間でのプライベートポイントを使った取引を認めているしそれに流石に一ヶ月無料生活をさせようと思うほど鬼畜ではない。でも軽井沢は違う。あいつがやっているのはただのポイントの搾取。ただの恐喝だ。」
　俺は少しため息を吐く。そして続ける
「あいつは平田の彼女っていうステータスを持っているぶんクラスでも強い発言力を持っている。別に人の恋愛に口うるさく文句を言うつもりはないけど。今回ばかりは違う。今回は発言力を使ったポイントの恐喝。あいつポイントが使いきったことに関して全然悪いと思ってないんだよ。平気そうにヘラヘラ笑って一人あたり二千～五

千ポイントをとっている。小野寺。篠原。二人に聞くけど軽井沢に貸したポイントは帰ってくると思うか？」
　少し困ったようにしていたが二人は首を横に振る。それは否定ということ。即ちポイントは却って来ないということであった。
「……言っとくけどこれは佐倉や井の頭、佐藤に松下、ミホに櫛田も同じ意見だ。だから全員気にする必要はない。男子以上にカースト制が高い女子の中では言いたくても言えないことがあるからな。」
「なるほど。大江がやっているのはその女子の不満を取り除くことにつながっているのか。」
「そういうこと。金銭トラブルは最悪学級崩壊を招いてもおかしくないし。あいつは平田の彼女というステータスを持っている。もしこのまま乱雑に物事を進めていくと平田の評価もあいつのせいで下がることになるんだよ。」
　まぁ仕込んだことなんだけどな。元々平田を軽井沢から引き離すことを目的としていることだ。
　クラスの中の敵だが平田は恐らく櫛田と同じ中学校で何かトラブルがありＤクラスに配属された生徒である。だからステータスが高く、それでいて使い物になるのだ。
「でも、プライベートポイント大丈夫なの？いくらポイントを稼いでいるとは言っても結構出費がすごいんじゃないの？」
「正直なところキツキツ。来月に向けた余裕なんてもうないし。これから取引も多くなるだろうしな。だから中間の攻略法を他のクラスに売る予定。」
「えっ？本当に中間の攻略法なんてあるの？」
「あぁ。学校にヒントが結構多いし俺もすでに攻略法はすでに手に持っている。」
　実はもう生徒会長である堀北会長に前回のテストが終わった後すぐに取引をしてすでに手にしていたのだ。
「マジかよ。ならそれを何で俺たちに使わないんだ？」
「理由は三つある。一つ目は学力以外になるべく協調性を改善させたい。この学校は学力テスト以外にも他の分野が関わっている。俺が

推測するに学力、身体能力、協調性、行動力、知力、社会貢献がこの学校の主な参考基準になっていると思う。これは社会にでて会社にも使われている判断材料にもなっているからな。」
「ん?それってこの学校は学力ではないところが成績に含まれるってこと?」
「あぁ。それは確実。というかそうじゃなければ俺がこの学校に通えていること自体がおかしい。」
全員が首を傾げているが俺は話を続ける
「二つ目は勉強の基礎をつけさせるため。須藤には伝えてあると思うけど勉強も運動も一番大切なものは基礎を身につけることだ。これは部活動経験者なら分かるだろ?」
その言葉に松下と櫛田以外は全員頷く。須藤を納得させるのに使った一つでもあるのだが勉強の基礎をしっかり身につかせるということが基本になる
「そして三つ目。正々堂々だけが正しいことだと思わせないこと。即ち戦略。作戦の重要性を皆に分からせることだ。」
「……ん?どういうこと?」
「テストって勉強が攻略法の一つだろ。それも間違ってはいない。実際俺や松下、櫛田なんかは勉強を基本をぎっちり固めて成績は安定させている。でもここにいる部活動組の誰かはやったことはあることはあるんじゃないかな?その時だけ点数を取れるようにする方法を。」
「……あっ!!もしかして一夜漬けのことかな。」
すると櫛田には話を円滑に進めるように仕込んでいたのでまるで今思い出したかのように演技してもらっている。
最初から攻略法を教えている松下と櫛田にはもう分かりきった答え合わせをもう一度聞いているかみたいな感じだ。
「あぁ。正解。別に一夜漬けでも点数は取れる人は取れる。でもな一夜漬けもリスクが大きくそして確実に点数を取れるっていうわけではない。やまが外れるって人は絶対いるだろう。」
「攻略法の一つなんだね。」

「あぁ。……ここから先はもう攻略法の答え合わせをしているものになる。だから三万ｐｔを欲しくない奴が一人でもいれば俺はここでこの話を切る。」
　俺はそういうと皆を見る。
「……ひとつ聞きたいが何でその話を俺たちにしようと思ったんだ？」
「あぁ。簡単にいうのであれば部活動組。特に運動部は比較的に平均点が低い。赤点の須藤はまぁ論外だけど小野寺も篠原も赤点対象外とはいえない。三宅も理系特化で文系については今回の勉強会で基礎がちょっと危ないことに気づいたからな。不安があったら部活動に集中できないこともあるだろう。運動面に限ったら堀北、俺、高円寺は戦力になるが他は正直厳しい。だからこの部活動組は最低限即ち５０点以上をとってくれていたらそれでいい。運動面で頼らざるを得ないからな。」
「なるほど。赤点だけはどうしても避けて欲しくないわけね。」
「そういうこと。ついでに私と櫛田さんは大江くんの協力者として既に攻略法は知っているのよ。一応他には知らせていないけどそれでも円滑に物事を回すためには協力者は必要なんだ。だからこの試験に協力者になってほしいの。」
「……なるほど。利害の一致ってことか。」
「私はいいよ。勉強だと皆には叶わないところがあるから。赤点を防げる方法があるんなら。私も知りたい。」
　とまずは小野寺が手を上げる。成績に不安があり退学がちらついているのでその不安を取り除きたいのであろう。
「俺も同感だ。勉強の大切さはナオから十分思い知らされた。でも勉強会だけで俺は赤点が免れると思わねぇ。」
「うん。私も。」
「……俺も文系は確かに苦手だから聞いておきたい。」
　と全員が賛成したところで俺は頷く。
「それなら話を続けるぞ。といってもこれ攻略法は簡単なんだよ。やまが当たらないから問題ってこと。絶対に出る問題が分かっている

のなら外しようがないだろ？」
「それができないから一夜漬けはできないんじゃないの？」
「まぁそう思う人が大概だろうけど。これを見てくれ。」
と俺はそうやって前回の小テストと全く同じ問題が載っている
ただしひとつの名前だけ明らかにおかしいところがあった
そこには　1—A堀北学と書かれた文字。所謂今の三年生がやった試験ということだ。
「えっ？これって。」
「生徒会長が一年生だった時の問題？」
「そう。そしてこれが俺たちがやった問題だ。」
お互いに１００と書かれた俺のテストと問題を見比べる。そう答えも問題も一言一句同じなのだ。
「これは一学期の中間では使えるが期末では全く使えないことが判明している。即ちこれが攻略法。先輩たちに過去問をもらうってことだ。」
「……でもいいの？過去問を使うなんて学校の規則に。」
「それなら学校でレストランを開く方や俺とミホがルームシェアしている方がダメだろ。」
「……それもそうね。」
皆が苦笑している。まぁこれで生徒間のポイントの行き交えができると確信したのだが。
「まぁとりあえずこういうこと。まぁ今年から変更になるってことは考えにくいけど。一応勉強だけはしておいてほしい。一応二年と三年の中間見る限りは同じ問題だから変更になるって感じはしないけど。」
「一応生徒会は試験に介入できるらしいから警戒しておいてほしいの。それに帰宅部の人たちや平田君たちも攻略法を知っているのであれば勉強をサボる人もでてくるだろうし。」
とそれには全員頷く。すると注文した料理が届き始める。
「まぁつまらない話はこれでおしまい。後はちゃんと飯を食って体を作れ。」

と俺が言うと全員が一斉に料理を食べ始める。その風景を見ながら俺も自分の頼んだピザを食べ始めるのであった。

写真友達

知ってる事や気付いたことを何でもかんでも喋ってたら、人間関係めちゃくちゃになるんだよ。
ＷＯＲＫＩＮＧ!!　ｂｙ相馬博臣
５月１日から３日が経った後平田が動き出す前に俺は既に動き始めていた。
平田たちが動きだす前に俺は櫛田から連絡をかけて全員向けに朝のホームルーム前の勉強会をセッティングしたのである。
放課後遊びたいとかそんな考えを持っている奴はやっぱりいるのもあるが、決定した原因はミホの料理の決定であろう
実は勉強会を開くために俺たちが経営している店は今も予約が多く何もなく集中できる空間として店はテスト期間最終日まで全部満席なのだ。
応用問題は俺、基礎が分からなければ櫛田と松下と言った豪華布陣。特に櫛田は餌としてはかなり有効的だ。今日もクラス全員を騙し続けている。実は部活動組の提案がきっかけで朝に勉強を見ることになったのだが。参加率はかなり高くクラスの赤点組が全員参加していた。
勉強会ならば朝の教室ならば借りなくてもいいし短時間で勉強もできる。ずっと一手先の手を使い俺は既にクラスを引っ張っていた。
またミホの経営がのり今は
そしてそんな日常がさらに続いていたある日のことようやく俺は趣味に使うお金を捻出することができたのであった
「……やっと買えた!!」
「ん？買えたって何か買ったのかい？」
「あぁ。これから必要になりそうなものと俺の趣味かな？」
と俺は個人的に使う金額で電子機器メーカーで買ったカメラを見せる。
「カメラ？写真を撮るのが好きなかい？」
「あぁ。アウトドアが好きだったからな。それに両親が仕事の関係上

昔から地方に行くことが多くて風景画撮るの好きなんだよ。それにプールの時に泳ぐのが役に立つって言っていただろ？それならばもしかしたら島かどこかに行くって思って。」
「へぇ～意外。」
「まぁそれに写真があると何かと纏めやすいだろ？これからのことを考えるとカメラは必ず必要になるだろうしな。」
　俺はそういうとミホは本当に意外なのか俺のカメラを見ると
「あれ？もしかしてそれってもしかしてあいちゃんと同じカメラじゃない？」
「あいちゃん？……って佐倉か？」
「うん。あいちゃんも撮影が趣味なんだ。」
「……う～ん。まぁ俺は覚えがあるかな？さすがに言えないけど。」
「……？あいちゃんのことで少し知っていることがあるのかい？」
「あぁ。さすがに伏せておくけどな。ちょっと色々とやばそうだし。ちょっと出かけてくるな。せっかくの休みだし。」
「……勉強教えてよ。」
「お前今日友達くるんだろうが。俺は邪魔だと思うから外でてるんだよ。」
　もしかしたら案外佐倉とは仲良くなれるのかなと思いながらもデジカメを持って俺は外に出る。
　一番安い奴を手にしていた俺は始めて休日らしい休日へと俺は足を向けた

　俺が学校内で写真を撮っていると俺はフラフラしながら歩いている。
　できれば夕日を綺麗に撮れるスポットを今探していて海岸沿いを歩いていた。
　よくよく考えたら期末前じゃないと余裕ができないって方もおかしいけど４月は対応に追われていた。５月に入り仕方なくチェス部にも殴り込みにいったり、勉強会や須藤の練習を付き合っていたのもあり時間に余裕もなかった

だから俺にとって学校に来て始めて休みと呼べる時間だった
学校の屋上も恐らく夕日は綺麗であるがやっぱり海沿いの夕日ほど綺麗なものはないと思っている。
天候は1日1日で変わり絶対同じ風な写真はあれど全く同じ写真はない。
家には俺は大量の友達と一緒に写っている写真がある。その時の笑顔は俺の本当の笑顔であり、子供っぽいと呼ばれるくらいに無邪気な笑顔であることを弄られている俺が写っているのだろう
楽しかったな。
バスケットボールや他の友達と遊んだ記憶は正直俺にとってはいい思い出だ。
俺にとって友達と過ごす時間はかなり有意義でありそして本当の自分をさらけ出せる時間である。
昔から大人から天才と呼ばれてきた俺を普通の学生として。扱っていた人たち。
俺が完璧超人ではないことを知っていたからでありそして本当に友人と思っている人である。
されどこの学校ではそんなことができない。いやそういうことをできなく自分でしてしまった。
元々俺自身天才であることには間違いないのであろう。
実際俺みたいな人間がいたならば俺は真っ先に使うことを決断するし過小評価は自分自身でもしないのが俺である
だから普通の学生生活を送れないことは元々分かっていた。
俺はここに来たら必ず勝負に囚われてしまうことを入学前から分かっていたからだ
別に勝負が楽しくないってわけではない。
実際クラスを率いていることや戦略を作ることには俺には合っている。
だけども普通に青春をしてみたいと思うのも確かだ。
友達を作り恋に落ちて彼女を作ったり振られたり。そんな漫画みたいな生活をしたいって思ってしまう。

やるからには全力を出す。でも実際は一人の大江奈緒という人間として見て欲しい。
弱点だってある。気づかないことだってある。
勝ちたいのとクラスメイトみたいにはしゃいでみたいって思ってしまう
「……はぁ。」
空を見上げ一枚写真をとる。晴天の空が写真に刻まれそして俺はカメラを確認する
すると同じくパシャとシャッター音が聞こえる
「ん？って佐倉か？」
と振り向いた俺の近くにいたのはなんの偶然か海をバックにいつもの少しおとなしめな少女とは違い、グラビアアイドルの雫として活躍している姿をしていた佐倉愛理の姿だった。
「……へ？」
「よう。お前も写真撮りに来たのか？」
「……えっ？うん。」
「まぁ息抜きならいいけど中間考査近いからほどほどにしとけよ。佐倉も安全圏ではないからな。」
と俺はそういって別れようと歩き出す。
俺も写真は好きだし話してみたいんだけどどこか男性の視線が嫌がっている節がある。
そしてその理由も知っているし、その不安のタネも分かっている。
だけど無理やり絡む必要はないだろう。
これればっかりは佐倉の問題でありＳＯＳを出さない限りは俺からは強く言えない。
「あの、大江くん。」
「ん？どうした？」
「もしかして気づいていたの？」
その答えに俺は頷く。
「う～ん。まぁ中学校の時に雫のファンがいたからな。確信はなかったけどちょっと調べさせてもらった。ブログの一枚にここの寮だと

思われる写真があったからな。あんまり知られたくなさそうだし黙っていたけど。」
「そっか。バレていたんだ。」
「クラスにはバレてないと思うぞ。というよりも気づきようがないかな。」
　さすがにイメージが違いすぎる。俺がそれに詳しいのはガチの雫のファンが中学校の友達にいたからだ。
「……そういえば大江くんカメラ持っていたんだね？」
「今日朝一で買ってきたんだよ。ちょっとクラスのことばっかりで自分の趣味に金を回す暇なかったから。」
「写真好きなの？」
「趣味の一つだよ。カメラの機能はそこまで詳しくはないけど俺自分で撮ったアルバムとか家にある。結構友達や部活動仲間と遊びに行く時撮っていたし。よく地方や登山とかいった時に写真撮って思い出として残していたりしてたからな。」
「どんな写真を撮っていたの？」
「例えば地方で思い出深いのは竹田城かなぁ？天空の城って別名がついているんだけど。」
　と俺は暫くの間友達や仕事のついでに抜け出した時に撮った写真について佐倉に話す。すると佐倉自身も興味があるのか質問を挟みながら少し盛り上がっていて暫く話し込んでしまう。
　お互いに撮影の話をしながら今日の目的、そしてお互いの学校内の撮影スポットについて話が噛み合いお互いに笑顔が溢れる。
　本気で写真が好きでなければできない会話に俺たちは時間を忘れて話続けた結果。
　気づいたら既に日が暮れていてとても夕日を撮る時間には間に合わない時間になってしまっていた。
「あっちゃ～こりゃ失敗したな。」
「私も今日のブログにあげる写真撮れてないや。」
　小さくお互いにため息を吐く俺と佐倉だったがあんまり俺はショックを覚えてなかった。佐倉もお互いに撮影好きなだけあって

撮影仲間ができたのが嬉しかったしお互いに熱中するものにはとことん舌が回るタイプらしい。
「……今度ゆっくり話さねぇ？ちょっと少し話足りないし。」
「えっ？いいの？」
「写真が趣味って人少ないだろ？それに俺あんまり人撮るの得意じゃないからコツ教えてほしいなって思って。」
「私もあまり風景写真って撮らないから……後もう少し地方の話聞いて見たいな。」
「ん～それなら連絡先交換したほうがいいか？Ｌｉｍｅならチャットのほかにお互いに撮った写真も共有できるし。」
　すると頷く佐倉に俺は目を輝かせ頷く。俺は軽くスマホを操作しそしてＱＲコードで佐倉の連絡先を交換する
「まぁ、時間があれば少し聞かせて。今日はもう遅いし帰ろうぜ。」
「う、うん。」
　と並びあって少し話しながら寮へ帰る。なんか久しぶりにクラスでただの大江奈緒としての友達ができたような気がした

図書館での騒ぎ

小せぇ・・・小さすぎるぜ！優れた人材を使いこなし、国を育てるのが主君の器だろうが！

織田信奈の野望　ｂｙ相良良晴

テストまで後一週間に切り勉強会の雰囲気がさらに厳しくなっていた

今は図書館で俺含めて攻略法についてはまだ見つからず俺の協力者しか知れ渡っていない

協力者は九名に当たるが今は既に過去問題にシフトさせている

今いるのは赤点対象者だけを集中して教えており、協力者はミホと櫛田が参加している

「授業受けて思ったんだけどさ、地理って結構簡単だよな」

「化学も思ってたほど難しくない」

今やっている問題を見ながら、池と山内がそんなことを言った。

「どっちも基本的に暗記問題が多いからかな？英語や数学は基礎が出来てないと解けない問題が多いし」

「まぁでも地理は時事問題が出ることもあるから油断はできないよ。」

「ジジイ問題？」

「時事問題。俺が新聞読んでいるのはその時事問題があるからだよ。最近起きた政治や経済における事象のこと。要は教科書に載っている問題だけが出題されるとは限らないということ。」

「げぇ、そんなの反則だろ。テスト範囲の意味ねぇじゃん！」

「まぁ今回の試験では絶対に出ないから大丈夫だと思うぞ。」

そういうと確信を持って言っている俺に全員が首をかしげる

「じゃあ私から皆に問題ね。帰納法を考えたのは誰でしょうか？」

乗っかるように櫛田が全員に問題を出した。

池たちは櫛田の問題を考えているのか皆一様に首を捻った。

「えーっと・・・・・　さっき授業で習ったやつだよな？」

池がシャーペンを回しながら思考する。

「あぁアレだ。アレ。なんかスゲェ腹の減る名前だった気がすんだけ

ど」
「フラン・・・ フランシスコなんちゃらだった気がする・・・・・」
「いや、ザビエルみたいな名前だった気がするぜ」
３人は朧げながらも覚えているみたいだが、明確な答えは出てこない。
「あ、フランシス・ベーコン。じゃね？」
池がようやく思い出したのか、導き出した答えを櫛田に言った。
「正解っ！」
「うっし！ これで満点確実だな！」
「いや、全然でしょ・・・・・」
と呆れた様子の赤点組。少し騒がしいので俺が注意しようとしたところ
「おい、ちょっとは静かにしろよ。ギャーギャー煩えな」
隣で勉強していた生徒の１人が文句を言ってきた。
「お？ あぁ悪い悪い、ちょっと煩かったよな。問題が解けて嬉しくてな～
帰納法を考えたのはフランシス・ベーコンなんだぜ？ 覚えておいて損はないからな～」
注意されていても池はヘラヘラと笑いながらそう言った。
しかしその発言に何か引っかかったのか、文句を言ってきた生徒の片眉が上がった。
「あ？ お前ら、ひょっとしてＤクラスの生徒か？」
そう言うと、彼と一緒に勉強していたであろう仲間たちが一斉に顔を上げた。
皆一様に池を始めとするＤクラスの面々をジロジロと見ている。
そんな目で見られれば良い気がするわけもなく、須藤は不機嫌そうに口調を強張らせた。
「んだよ、俺らがＤクラスだから何だってんだよ。なんか文句あんのか？」
「いや別に？ 文句はねぇよ。俺はＣクラスの山脇だ。よろしくな」
ニヤニヤとしながら、山脇は須藤たちを見回した。

「ただなんつーか、この学校が実力でクラス分けしてくれて良かったなってよ。お前らみたいな底辺と一緒に勉強させられたらたまんねーからなぁ」
　俺たちが呆れた様子で山脇を睨みつける、山脇はヘラヘラとした態度を崩さない。
「本当のことを言っただけで怒んなよ。もし校内で暴力行為なんて起こしたら、どれだけポイントに響くか。おっと、お前らはなくすほとんどポイントもないんだっけか！じゃあ退学になるかもなぁ？」
「……なぁ山脇。」
「なんだよ。れ」
　劣等生と言おうとしたんだろうが俺はボイスレコーダーを取り出しそれを山脇に見せると山脇たちは豹変する。俺がボイスレコーダーを買っていることはクラス全員の共通事項だ。だから怒る前に記録するだろうと思っていたのだろう。嫌な信頼だ。
「っ！」
「お前の発言した暴言は全て録音させて貰っている。図書室でこれだけの暴言を吐いたんだ。これが学校に報告したらどうなるだろうな。」
「てめぇ。それを渡せ。」
「おっと。そのボイスレコーダーはポイントを支払って買ったものだ。商品番号と俺の寮に残してあるものを合わせて窃盗もつけるか？これほど大勢に見られているにも関わらずさらに暴行も追加するか？」
「て、てめぇ。」
　震える山脇に俺は軽くニヤリと笑う。
「それに残念だけど、Dクラスからは退学者は出ないよ。それに、私たちの心配をする前に自分たちのクラスを心配したらどうかな。驕っていると足を掬われると思うよ」
　ミホの言葉にの発言を聞いたCクラスの面々は皆一様にゲラゲラと笑い出した。
「くくっ、おいおい何の冗談だそりゃ」

「俺たちは赤点を取らないために勉強してるんじゃねぇ。より良い点数取るために勉強してんだ。お前らと一緒にすんな。大体お前らフランシス・ベーコンだとか言って喜んでるが正気か？テスト範囲外のところを勉強して何になんだ？」
「え？」
　Ｃクラスの生徒の言葉が聞き捨てならなかったのか、沖谷が思わず声を出す。
「もしかしてテスト範囲もロクに分かってないのか？　これだから不良品はよぉ」
「ふ～ん。まぁいいよ。結果を見ればどっちが頭がいいのか分かると思うよ。それにこれで証拠はきっちり録音されているだろうしこの音声は生徒会に報告させてもらうから。」
「……お前ら学習能力ないのか？」
　呆れてしまう俺は悪くないだろう。さっきボイスレコーダーを見せたばっかりなのにさっきから自爆していっているのだ。
「……っ！ヤベェそれをよこせ!!お前ら。」
「おう!!」
　と俺のボイスレコーダーを取ろうとした矢先だった。
「無理だよ。だって私も撮っているからね。」
　と聞き憶えのある声が聞こえてくる。
「い、一之瀬……」
「久しぶりナオくん。」
　とＣクラスの奴らを無視して俺に話しかけてくる帆波こと一之瀬帆波に俺は小さくため息を吐く。
「久し振り。帆波。つーかまだ一ヶ月くらいしか経ってないだろ？」
「絶対育中落ちたって言っていたのに……。もう。受かっていたのならこっちのクラスに来てくれてもよかったじゃん。」
「お前Ｂクラスのリーダーだろうが。この学校の仕組みを考えたらお前と俺は敵同士だろうが。」
「まぁそうだけど私は気にしないよ。」
「俺が気にするんだよ。」

と俺と帆波がそんな軽口を言っていると櫛田が反応する
「えっと？帆波ちゃん？大江くんと知り合いなの？」
「あっ！桔梗ちゃん。うん。私ナオくんと同じ中学校だったから。」
「そうなの？」
「うん。いつも学校行事とかはナオくんが引っ張って私がその補助をしていたから。」
　すると笑顔で俺の帆波。Ｃクラスはそれにただ驚くばかり。それもそのはず帆波はＣクラス相手に小さなトラブルがありそれに完全勝利という形を納めている。その帆波が補助についていたということに驚きを隠せないでいた。
「そういえば中間考査の範囲の変更もしかして先生から聞いてないの？」
「聞いてないな。そんな話は。」
「……ふ～ん。でも焦ってはないよね。もしかして誰かを赤点にさせようとしている？それとも……全員が赤点回避をできる方法を既に持っているのかな？」
「さぁな。ってお前に嘘をついても意味なさそうだしな。あぁ。俺はテスト範囲の変更も知っていた。そして全員の赤点くらいなら防げる方法を既に所持している。」
　すると全員が固まる。中間考査の攻略法を既に見つけたと言っているのと同意義だからだ。
「にゃはは。……うん。やっぱりＤクラスは侮れないよ。これから先絶対に台風の目になるかもね。」
「これでいいか？帆波。」
「うん。聞きたいことはいえたしＣクラスの抑制力になる弱みを共有したから大丈夫だよ。」
「あぁ。まぁできるだけ俺としてはＢクラスとは協力体制を得ていきたいところだけどクラスの意向があるしな。」
「うん。その時はＢクラスは受けるよ。私としても今Ｄクラスとは協力していきたいからね。近いうちに協力体制の使者。ううん。私がそっちのクラスに向かうよ。」

と実質的な同盟の言葉のやり取りにあっけにとられるCクラスのメンバーもどちらが不利であることが分かったのだろう
実質これから上のクラスと下のクラスに追われるようになるのだ。これによる精神的なダメージは桁違いだろう。
「……今回俺らは訴えるつもりはない。だけどCクラスがちょっかいをかけて来た時の交渉材料としてこれは使わせてもらう。」
「こっちとしても今は争う時期ではないからね。……こうなったのも自業自得として龍園くんに伝えておいてね。」
会話の中で情報交換するのは昔からの癖でもありそして慣れでもある。たった数分の会話でCクラスはこれでもない不利に追い込まれていると言っていいだろう。
「くっ！」
「お、覚えておけよ!!」
と言いながらなんかモブみたいな掛け声をしながら図書館の外に逃げていくCクラスの奴ら。
「あいつら何がしたかったんだろうな。そうそう。テストの変更範囲一応書いてくれない？帆波。」
「うん。いいけど。私たちもその攻略法教えることって。」
「別にいいぞ。放課後送るから。」
「えっ？いいの？」
「敵対するよりマシ。プライベートポイント二万でどうだ？三万だったらオプションもつくけど。」
「オプション込みでいいよ。」
「了解。学生コードと連絡先教えてくれ。」
俺たちは何もなかったように取引をする二人にクラスメイトすらあっけにとられたようにただその取引を見つめていた。

大江派と平田

足手まといなのは力のない者では無い、覚悟の無い者だ
ＢＬＥＡＣＨ　ｂｙ朽木ルキア
図書館騒ぎの翌日クラスでテストの変更範囲の内容を伝えるとクラスは荒れまくっていた
泣き出すもの不安になって絶叫するもの。
そんな阿鼻叫喚と呼べる中で赤点組は落ち着いていた。
中間考査の攻略法を既に持っている。
それは取引の中でも使っていたから確かなんだろう。
だから余裕があることが分かっている。
でもそれならばなぜ使わないのかが分からない。
そんな表情が見られていた。
「……話は聞いているけど大江くんは中間考査の攻略法について知っているんだよね？」
すると平田がそんなことを言い出す。実は勉強会の繋がりで平田とはそこまで険悪な仲ではないのが今の現状なのだ。
どうしようかと悩んだ
「……少し外に出れるか？あんまり聞かれたくない話だから。」
「……いいけど。」
と俺と平田は廊下に出る。
「先に言っとくけど言わないし今は使用しねぇぞ。」
「えっ？」
「攻略法っていうのは過去問なんだよ。二年と三年の合わせたんだけど全く同じだった。今使うと赤点組は丸暗記するだけになるだろ？使うタイミングを誤ればこの攻略法は今後に響くんだよ。それにもしそれが外れていた場合それ頼みだったらどうなると思う？」
「……なるほど。万が一の保険ってわけだね。」
「攻略法自体がな。」
平田も納得したらしく頷く。
これも今年から変わった可能性があるって考えると

「それにそもそも今回テストで俺はプライベートポイントを稼ぐ行為は俺たちのクラスのためにならないと思っているんだよ。」
「……どういうことだい？」
「言っとくけどDクラスに配属されたのは誰にでも欠点があるってことだ。勉強だけできても意味がない。運動だけできても意味がない。でもなこのクラスに一番足りてないのはコミュニケーション能力だと思っているんだ。」
「コミュニケーション能力？」
「あぁ。ここの教室池、平田、櫛田くらいしか積極的に話にする奴いないだろ？できれば幸村と堀北を巻き込みたかったんだけどあの二人は個人主義が強くてな。」
「うん。それは僕も思うよ。あの二人は学力で価値が決まるって考え方だからね。」
　起業家としてはあの二人よりも池の方が雇いたいと感じられる。勉強だけが正しいとは限らないのが俺の考えかただからなあの二人とは相性が悪い。
「俺としては得意科目を見つけることにシフトした方がいいと考えている。ぶっちゃけ俺たちの担任は何を考えているのかどこか俺らを試しているように感じるからあんまり信用できない。」
「うん。薄々感じていたけど、説明が他のクラスよりも明らかに少ない。大江くんも図書館で少しきになることがあって探していたんだよね？」
「あぁ。予感は的中。卒業アルバムを見た所、B組の星之宮先生と同級生でここの出身。その当時おそらく因縁みたいなものがあるんだと予想している。」
「厄介だね。それなら今後の方針は勉強会をそのまま継続させて……いつだそうと思っているの？」
「3日前。前日は睡眠をとった方がいいからな。」
　すると頷く平田。どうやら賛成なんだろう
「とりあえず気を緩めないように。他クラスからの妨害もありえないことではないからな。」

「分かったよ。僕の方も勉強会を開いてみる。」
「あぁ。そっちは軽井沢とかいるからな。俺はさすがに赤点組の救済で精一杯だし。」
「あはは。ごめん。任せてしまって。」
「言っとくけど貸し1だからな……一つだけいうけど恐らく全員での卒業は俺が先導していても難しい。ここはそういう学校ってことを理解しておけよ。」
平田は少し困ったように頷く。条件付きとはいえ平田派っていうけど平田がこっちの派閥に入っているっておかしいよな。
まぁ軽井沢の彼氏役っていうステータスを持っている分さすがに同情してしまうけど。
……そして俺たちは別れる。二分していると演技をしながら水面下で動き始めていた

テスト勉強はあれからも素直に続けていた。俺が教師代わりになり質問は理解している人が対応。それだけでも十分理解ができたらしい。
Bクラスの帆波と正式に協力関係を結んだりBクラスも勉強会に参加したりお互いに意義のある勉強会を開いていた。
そしてテスト3日前俺は教壇に立つ
「みんなよく聞け。ついでに櫛田、ミホ。例のものを配ってくれ。」
「うん。」
「了解。」
と俺がそういうと全員がいや不思議そうにその用紙を見る。すると全員がその用紙を見た途端絶句した。
「お、おい。これって。」
「一回静かにな。それじゃあ答え合わせするぞ。」
俺がそういうと全員の視線が集まるどころかほとんどが問題用紙に集中する
「俺が手に入れた攻略法。それは過去問だよ。と言っても手に入れたのは偶然だったけどな。俺は昔からテスト勉強をするときは過去問

で学校の問題の傾向を見ようと調べようと思ったんだよ。」
「問題の傾向？」
「高校受験の時もやっただろ？過去問を使って問題を解きそれを繰り返す。本当はこれで模擬テストを俺が作成してその点数でプライベートポイントを競わせるつもりだったんだけど……まさか全く同じ問題がでるとは思いもしてなかったけどな。」
　さすがにこれは俺も予想外だった。問題用紙には二年Ｄ組の先輩と堀北先輩の問題が並んでいる
　それは全く同じってことはそれが攻略法と意味していることだった
「……即ちこの問題を丸暗記したら？」
「まぁこの問題が出たならば高得点をとれるだろうな。」
　するとクラスメイトから歓声が上がる。ギリギリだった人は泣き出しそうになり少し涙腺が緩んでいる。
「……静かに。」
　俺はそうやってみんなの歓声を遮る
「……一応攻略法ってわけで確かにこの問題が出る可能性が高いだろう。だから基本的にはこれを覚えることを重視しておけばいい。ただ万が一の問題が過去問通りに出なかった場合のための保険をとっておきたい。」
「……保険？」
「あぁ。これは僕も話し合って決めたことなんだ。大江くんいうことには生徒会では今年の学生は豊作の年って言われているらしい。」
「豊作？」
「あぁ。全てのクラスがＳシステムを最初の月を迎える前に気づいたのは未だになかったんだよ。でも今年は形はどうやれ全てのクラスで２週間以内にシステムに気づき始めた。……もしかしたら試験の内容がこれまで以上に難しくなっている可能性があるってことだ。」
　全員が絶句する。実はこれは平田、帆波と一緒についている嘘である。豊作の年って呼ばれていることは確かだが試験の内容は今まで通りの難易度であることを橘先輩がそう言っていた。

でも攻略法があるとはいえ気を引き締めるように三人で話し合い決定した。これは櫛田や松下も知らない情報だがおそらくこういったことに関しては理解しているのだろう。
「……だから万が一のためテスト範囲内の勉強会を２時間ずつほど開く予定だ。朝、夕方、夜。夕方はＢクラスと合同でＢクラスの教室で行う。それ以外はこの過去問を徹底的に覚えろ。部活動がある奴は朝の１時間以外は全部暗記でもいい。」
「それでいいのか？」
「あぁ。問題には似た傾向や問題と似た問題が出やすい。それなら基本的な公式や重要点は基本的に頭に入るから赤点回避はできるだろうな。」
俺はそうやってみんなの方を見渡す。
「それに赤点回避とかそんなヤワな教え方してねぇよ。とりあえず今日はここで解散するけど復習忘れるなよ。」
俺はそういうと教壇を離れる。するとわっと歓声があがり全員に盛り上がりを見せる
そしてその三日後
平均点数８２点を叩いたＤクラスは平均８０点のＢクラスを退け学年トップで中間考査を突破した。

変化の時期

投手を輝かせるためならなんだってするぜ。
どんな嘘でもどんな嫌われることでもな
ダイヤのＡ　ｂｙ御幸一也

「つーわけでポイントの支給渡したよな？英語１００点は王と堀北。数学は幸村と堀北と高円寺。国語は池と平田、高円寺に幸村。理科総合は堀北、高円寺、幸村。社会は幸村、高円寺、堀北。以上だ。ついでの総合は俺が５００でトップ。二位が堀北と幸村が並んでいるからなこれがこのメンバーにはポイントを振り込んである。」

俺が言うとすると貰ったメンバーの中で王は少し嬉しそうに微笑み池はガッツポーズをする。特に池は俺が進めた国語だけに集中したこともあり、まさかのトップ通過であったことは俺自身も驚いた。

「まぁ、報酬はこれくらいにして、一ヶ月間お疲れ様。一応クラスポイントもある程度は回復すると思う。でもな。過去問があったにしても凡ミスが多い印象のテストだった。１００点が全員上位三人をキープしている中で過去問があったにしろ１００点が少なすぎる印象だ。」

全員がうっと小さく目線をそらす。これが今の現状。とりあえずポイント回復はできたのは良かったがさすがにこの結果は少し不満だった。特に五教科全て１００点満点が俺だけという現状だ。ついでに俺は過去問を使っておらず素の点数である。

「Ｃクラスも攻略法を見つけてＡクラスも派閥の一つの方はすでに攻略法を見つけたらしく平均点は全てのクラスで７５を超えていたらしいから今回ポイントの差はあまり詰まることはないだろう。」

「……それじゃあ一向にＡクラスとの差が縮まることはないんじゃないの？」

とクラスの一人はそういうと俺は首を横に振る。

「テスト前に先生が言ったこと覚えている人はいるか？」

「えっ？」

「えっと、もし今回の中間テストと七月に実施される期末テスト。ど

ちらでも退学者を出さなかったら、お前たち全員夏休みにバカンスに連れて行ってやるってやつ？」
「あぁ。というよりも帆波のクラスでもこの話はされていたらしい。おそらく全クラスにされていると考えていいだろう。」
「……それって夏休みに何かあるって考えた方がいいってこと？」
「あぁ。それに話の内容から結構分かることがある。青い海、白い砂浜、そして照りつく陽の光。って茶柱先生は言っていた。でもＢクラスは学校が所有している無人島でバカンスって星乃宮先生が言っていたらしい。」
　すると顔つきが変わるクラスメイトに俺は少しだけ息をつく
「恐らく無人島でサバイバルの試験があると見ていいだろう。実際この試験を使用している企業があるからな。そしてその試験には言わずもがな……クラスポイントが大きく関わってくることに違いないだろう。」
　クラスメイトがざわざわと騒ぎ始める。
「先輩から聞くにクラスポイントが大きく関わってくる試験は特別試験と呼んでいるらしい。一応ここの学校では勉強以外の評価も含んでくる。知識、運動神経、行動力、協調性、もちろん中学校からの態度も関わってくる。言っとくけど俺は投資家として既に数億円稼いでいるんだよ。だから社会のことはみんなよりも詳しい方だと思っている。」
「す、数億？」
「あぁ。一千万単位の取引もできるし現代社会において学生の株式の購入はできるからな。俺は小三のころからやっていたけど普通に数百万単位で損することだってあるしな。元々見る目はあったから軌道に乗せられたけど。」
　と俺は軽く息を吐く
「って話が逸れた。社会に出たら確かに勉強も大切なスキルの一つだ。でも、勉強だけができても意味がない。例えば勉強ができる社員と取引先から仕事を持ってくる社員。どっちが会社から重宝されると思う？」

「……取引先から仕事を持ってくる社員。」
「そう。これには判断力、コミュニケーション能力とか多くの勉強とは関係ない力が試されている。これも必要なスキル。恐らくここはそういったことを試されているんだよ。今回の試験だって純粋な学力の他に過去問っていう攻略法があっただろ？これは発想力や先輩に交友関係があるひと、もしくは知らない先輩に話しかける度胸や取引でどれくらい安く買えるかといった値引きなど多くの攻略法があった。一応他の攻略法は先生にポイントを支払ってどこが重点的にテストにでるのか聞きにいくとか勉強とは関係ない解決法もあっただろ？」
　と俺が言うと全員が驚いたように俺を見る。中間テストの攻略法なんてたくさんあったのに誰もそれを見つけようとしなかった。一つのことに目を向けてもっと柔軟な思考ができなかった。
「俺はＡクラスを目指す。でもそれはＡクラスになるだけではなくてここにいる全員が社会に出た時に役立てる人材を作ることを目的とする。ぶっちゃけ高校なんてただの過程にしかすぎない。……言っとくけど勉強や運動だけできただけで社会に通用ほど甘くねぇぞ。一流大学いったところで仕事で結果がでなければ首になるのは当たり前なことだからな。」
　これは俺が恩師である小学生のころの先生から聞かせれてきた言葉だった。勉強だけできても意味がない自分の武器を磨け。才能は人間ひとつはあるものだ。それならその才能を磨けば自分にとって最高の人生になると。
「まぁ何がいいたいっていうと学力だけじゃどうにもらなないってこと。多分ここに来たからには誰もが自分の才能を持っていると俺は思っている。Ｄクラスに来たってことは昔やんちゃしてたりいじめられて不登校だったり、いろんな闇を抱えたりしているかもしれない。でも別にそれでもいいと俺は思うし、別にそれを知ったところで拒絶もしない。」
　俺がそういうと全員が驚いたように俺を見る。
　元々過去の人望は関係ない

自分が見ている今が俺にとってはその人の特徴である
それにこれからクラスに必要になるもの
助け合いの精神
これは俺にとって何よりも大事にしていることである。
人間欠点があって当たり前。それならば俺の欠点を補える人が俺のサポートをすればいいと。

「今後特別試験で俺はクラスメイトを頼ることが多くなる。だからみんなも苦手な分野は誰かを頼ることを覚えてくれ。苦手なことできないこと。それを黙っているから悪化するのであってこれからは絶対に誰かを頼らなければいけない時がある。平田でも櫛田でも俺でもいい。他の誰でもいい。」
「頼るって。」
「例えば櫛田は実行力や交友の広さだったらこの学年一といっても過言ではない。他のクラスとの交友の綱渡り的な存在になるだろうし。須藤に限っては運動神経は高円寺と俺がいるから目立たないけどこの学年トップクラスだぞ。俺も運動面は活躍できるけどいつ捻挫を再発してもおかしくはないからな。」
少し苦笑してしまう。それは俺にはアクシデントがつきものといったものだった。
「勉強面に関しては幸村、堀北、科目によったら英語は王がこのクラスでも抜け出している。コミュニケーション能力でいえば池は誰にでも話題を触れるしノリもいい。」
俺はそう言うとクラスの方を見る。
「これが人の武器だ。そしてその武器ならば今でもＡクラスと戦えるものはある。だけどそれだけじゃ足りない。いや俺たちが上に行こうとするのなら……変わってもらいたい。」
俺がみんなに向けて宣言する。
「言っとくけど俺一人で勝とうでなんか思ってない。俺だけがいるだけで勝てるほどこの学校は甘くないからな。……例えば外村。お前ＰＣに強かったよな？」

「うむ。一通りのことはできるでござるよ。」
「それならマイクロソフト覚えてくれないか？資料作成とか俺が今やっている状態なんだけど他にもやることが多くてな。プライベートポイントを支払う代わりに資料作成手伝って欲しいんだけど。」
「……マイクロソフトでござるか？一通りのことはできるでござる。」
「ならそれに付随して、ＭＯＳ試験を受けてみないか？俺も簿記三級受けるつもりだし国家試験や資格に対しての学校の動きも知りたいしな。大学に行く時も内申点に加算されるし成績あんまり良くないぶん資格でカバーする形でどうだ？」
「うむ。……いくらでござるか？」
「　資格合格で３万。資料作成はそのつどだな。最低三千で資料の量や質で評価する形で。」
　すると少し考え始める外村。
「資格はともかく資料作成はいいでござるよ。」
「悪い助かる。できればＰＣの知識は外村に頼みたい。それが外村の武器だしな。」
「なるほど。確かに僕たちには無理だね。ネットの知識は外村くんが向いている。」
　平田が後押ししてくれる。これならいけるか？
「趣味も才能の一つだからな。外村はＰＣの知識。学校外で身につけるべき知識を伸ばしたほうがいい。ミホは料理の技能と計算能力に長けていたから簿記の資格を一緒にとってもらうしこういった戦い方も俺を基本にした方がＡやＢクラスには通用すると思っている。元々俺の作った制度にはそう言う役割もあるからな。だからプライベートポイントもクラス内でも活発にさせようと思ったんだ。元々生徒間で取引したらいけないルールなんてなかったしな。」
　すなわち一つの一年Ｄ組という社会を形成しようとしていたのだ。そして準備段階はほぼ整っている。
　取引をはっきりさせることによって俺は目的を作った
　だから後はそれに向かって行動するだけだ
「これからは協力しないと上には勝ちあがれない。行動しないと個人

でＡクラスになるのは勝手だけど…俺は卒業までにこのクラスでＡクラスに上がってみせる。そして俺はこのクラスでもここからでも一人一人が変われたらＡクラスに上がれるだけの力はあると考えている。」

最下位だからこそ自分と向き合う時間を与えることができ、そして自分の才能と向き合う時間を与えた。勉強会を開いたのも全部が計算のうちの一つだ。

「夏休みまで時間がある。だから俺と平田、櫛田は基本的にサポートに回る。基本的に自分の強みを伸ばすのもあり。苦手なことを鍛えるのもよし。でも覚えてほしいのはどんなことでも自分が一歩踏み出さなければ何も変わらないってことだけは覚えておいてくれ。」

と俺は一息つく。

「とりあえず解散。お疲れ様。」

俺の号令に全員が息を撫で下ろす。とりあえずこれで布石を一つ打った。

後は待つだけだな。

俺はそのいつものチャットアプリを開く。そこには佐倉愛里との会話を再び見返した。

日常

祈ればかならず願いが叶うなんてことはありえねぇ。だが、ギリギリまで必死に考えて力を尽くせば、そう悪い結果にばかりもならねぇだろう。

ＣＬＡＮＮＡＤ―　古河秋生

「……うん。うまく撮れているな。」

６月下旬俺は今撮った写真を見返していた。

そこには普段の生活の様子や日常の一コマを写真を撮りながら放課後を満喫していた。

最近は自然や人物ではなくケヤキモールや学校での部活動の様子など日常生活を写真に収めていた

佐倉とｌｉｍｅで連絡を取り合い今日一のものを見せ合うことが最近の日課になっている。今月のＭＶＰ投票も終わったこともあり放課後が少し余裕が生まれていた。

ＭＶＰ投票では圧倒的人気で俺と櫛田が選ばれた。そして男子二位は平田。女子二位はミホという妥当すぎる結果に。軽井沢と堀北は少し不満そうだったが一応生徒会長に頼み公平に投票されているので文句は言えないはずだ。

運動面でも勉強面でもうまくいき、さらに俺は今月中旬に簿記３級を受けた。自己採点したところ９割取れているはずなのでほとんど合格していると言っても大丈夫だろう。

麻雀部の方では相変わらずの賭けがうまくいき出資を抜きにしても今は１２０万ｐｔが溜まっている。さらにミホに限っては寮室を借りたことによって共同生活は終わりを迎え自炊をやり始めたのだがそうそううまくはいかず。櫛田や佐倉、ミホに連絡し料理の基礎を習っている。佐倉も自炊組でありミホと櫛田は忙しいと思っていたので最初の頃は佐倉に教わっていたのだが櫛田がなぜか不機嫌になり俺の家で料理を作り始めるといったことがあってお世話になっていた。

写真の技術もあがっているし。料理も着実にうまくなっている。

まぁやることが少なくなったのが幸いして俺たちは徐々に力をつけ始めていた。
麻雀の大会は一応都大会は団体戦は危なげなく突破し、反対に個人戦は珍しく振ってしまったこともあり決勝敗退。村上先輩が全国大会を決めた。
なので正直なところ暇である。忙しい時期を乗り切ったおかげで俺はその反動でかなり自由な時間を持っていた。
最初に仕込みに念を使っていたので俺は未だに特定のグループに入っているわけではない。なので誘われるとき多いのだがときにはこういった風に一人でふらふらと歩いていることも多いのだ。
と俺がしばらくした矢先だった。
「それでね～。こうちゃん。」
と手を繋いだカップルと思わしき学生の姿がいる。
学生生活を謳歌しているのかそこには不安のかけらもなく笑顔で話している。
「バスケやりてぇな。」
俺はポツリと呟く。俺にとって青春とはなんだろうかと考えさせられるものであった
俺も朝練で体力を保っているために須藤と一緒に朝練をしているが、それでも未だに試合はしておらずｌｏｒｌが試合に似た唯一のものだった。
……久しぶりにボウリングでもするか。
やっぱり一人だと面白くないしつまらない。
元々孤独が嫌いって訳ではないんだけどクラスの立ち位置上どうしても居場所が難しいというのがあり一人の時間が増えているのだった
平田はうまくやっているが元々俺はそう器用ではない。
今度平田と櫛田に聞いてみようかなっと思っていると
「あれ？なっちゃん？」
「……。」
「お～いなっちゃん!!」

「……ん？」
　なっちゃんという聞き覚えのない呼び名だったので別の人を呼んでいるのだと思っていたがどうやら俺がそのなっちゃんっていう人らしい。俺は聞こえた方に目を向けるとそこには長谷部が立っていた。
「ん？長谷部か。話すのは勉強会以来か？」
「うん。なっちゃんもケヤキモールに遊びにきたの？」
「写真最初は撮っていたんだよ。でも近くにボウリング場があるの思い出して久しぶりにやるかって思ってな。」
「一人で？」
「悪いかよ。」
「てっきり佐藤さんと松下さんと一緒に来ているんじゃないかって思っていたけどそうじゃないんだ。」
「あ～。まぁその二人とは結構一緒にいるけど軽井沢や篠原のグループにも参加しているからな。俺も明確なグループに入っている訳じゃないし。」
　と軽く苦笑する。長谷部自身もグループに入っていないので納得したようだった。
「それに中学時代は基本的に交友関係は受動的だったからな。あんまり友達作りが上手いって訳じゃないし少し空気読めないというか空気を読まない節があって。」
「なるほど。……っていうことは私と同類？」
「一応趣味繋がりで一人は結構仲がいいと思っているんだけど。…友達作りは確実に失敗しました。」
　少し苦笑してしまう。一応ミホとはビジネスパートナー的な存在だし櫛田も友達かと答えるには微妙すぎる。
　一応俺がわざと櫛田を安心させようと嘘の悪口を言っていることは気づいているだろうしな。
　今ちゃんと友達と呼べるのは佐倉くらいだろう。
「そっか～。……でも意外。最初怖いイメージ最初あったのになんか親しみやすいよね。仕組みを話出したとき、見下しているんじゃな

いって思っていたけど。」
「見下してないっていったら嘘になる。というよりも初日に時点で小学生みたいなクラスって思っていたし。……特に山内と池のプールの時は引いた。てか悪い。女子の胸で誰がデカイかでかけていたんだってな。さすがに不快だっただろ？」
「なっちゃんはやってないんでしょ？謝る必要はないんじゃないの？」
「不快だと思わせている時点で問題なんだよ。知ることなら誰にでもできる。知っているのに見て見ぬ振りをしていれば、それは同罪なんだ。」
　俺は小さくため息を吐く。あの時関わりたくないって思って注意をしなかったことはさすがに女子に関して失礼だろう
「ふ～ん。意外に紳士なんだ？」
「これくらい普通だろ？」
　さすがにこれくらいは男子の責任だと思うのだが……
「……」
「どうした？」
「ううん。何でもない。確かボウリング行くんだよね？私も行っていい？私も何にもすることなくてぶらぶらしてたから」
「いいぞ。別に。……ぶっちゃけ一人でやっても楽しくないし。」
　と意外に長谷部が距離感を詰めてきたことに驚く。
　元々群れることが苦手なタイプであることは明らかで自分の体つきのおかげで少々目立ち気味の長谷部。
　案外体型とか気にしない俺と三宅とかなら相性はいいのかもなと思いながらも俺と長谷部はボウリング場へ向かった

「あ～楽しかった!!」
「そりゃよかったな。……てか遊び疲れた。」
　あれからボウリング、カラオケ、ゲーセンなど多くの場所に付き合わされた俺はかなり疲労困憊だった。
「でも楽しそうだったじゃん。」

「いや。楽しかったからな。……ただはしゃぎすぎた。結構趣味が似ていることにも驚いたけど。」
「持ち歌が全く同じって。」
「一応男子向けのと女子向けで分けてはあるけど……つーか歌うめぇな。」
　と俺は軽く苦笑してしまう。ぶっちゃけカラオケは得意でも苦手でもないので俺自身９０点前後は出せるのだが９５点以上だしている長谷部に負けを認めるしかなかった。
「そ、そう。」
「まぁいいか。てかポイント大丈夫か？明らかに５０００ｐｔ以上は使っているだろ？今月１１２ｐｔだったけど。」
　中間考査では１００ｐｔそのまま入ったのでポイントは増え今月はすでに安全圏まで上がっている
「大丈夫かな。私そんなに無駄遣いする方じゃないから。」
「……ならいいけど。」
「気にしてくれてたの？」
「俺みたいにポイント稼いでいたら別だけどな。それに弁当組じゃなかったはずだし。」
「本当よく見ているね。」
　それが癖になっているのは仕方がないんだけどな
「……まぁ。久しぶりに遊んだって気がする。」
「そうなの？」
「この学校に来てから俺は結構行動してきたからな。それに毎回のように相談や資格の勉強に追われていたし。まぁ来月からの期末考査の勉強会の予定立てたり、まぁ色々とな。」
　と言ってはなんだけど長谷部はあぁと小さく呟いた
「それじゃあ連絡先交換しない？今度また誘うから一緒に遊ぼ～。」
「ん？お前群れるのあんまり好きじゃなかったよな？」
「……本当によく見ているね～。ストーカー？」
「さすがにこれくらいのことは全員分かる。一人一人で距離感間違えると大変なことになるからな。それに勉強会で長谷部は時間よりも

範囲を決めて勉強する方が効率がよかっただろ？あぁいう人は比較的みんなに合わせるのが苦手なタイプなんだよ。三宅や俺も実際決められた範囲をやった方が効率いいしな。」
　実際人に合わせさせるのが俺は得意なので俺も自分のペースでやることの方がいい。時間を決めていたのは須藤たちはそっち側の方があっているからであるからだった。
「…別になっちゃんならいいかな～って思っただけ。他の男子とは違うから。」
　まぁ、あんまり深くは入らない方がいいといい。俺はスマホを取り出すとその場で連絡先を交換する。
　まだ友人とはいかないかもしれないがこれでまた交友関係は広がったと言っていいのだろうか
「それじゃあ。また学校で。」
「じゃあね。」
　と言いながら俺たちは寮付近で別れそして俺は部屋に戻った。

助けを求めて

幸せを望むなら、出来る範囲でいいから……他者を思い遣る気持ちを忘れないで下さい。元々、君が持っていた大切で尊いそれを……捨てないで下さい

ありふれた職業で世界最強　ｂｙ畑山愛子

愛里：今、何してますか？

長谷部と遊んだ翌日俺は佐倉から連絡ツールで連絡が来る。珍しいと驚いていると俺はもう一度

「どうしたの？」

「なんで櫛田が入り浸っているんだろうな。」

と俺は適当に本を読んでいたのに櫛田が俺の部屋に潜り込んでき て俺のベットでゴロゴロと寝転がっていることに疑問を覚える。

お前クラスのアイドル的存在だろっとツッコミを入れたくなる気持ちをこらえているがそれでもこう言った場面はすでに珍しくない。

まぁ本当のアイドルは身近にいるのだがそれは櫛田も気づいていないだろう。

奈緒：部屋でくつろいでる。どうした？

と俺は返信するとすぐにピコンと音がなる

「はや!!」

「誰？」

「友達。」

と言って俺は返信を見るとそこには

愛里：ブログの件で話したいことがあります。

と簡潔な文。だけどそれは佐倉自身が勇気を出した一歩であることは俺にはすぐに分かった。

「櫛田少し外出てくるわ。」

「えっ？……ってどうしたの？もしかして緊急用かな？」

「あぁ。ちょっと時間がかかる。つーかちょっとお前にも頼む可能性があるから自室に戻ってくれないか？」

「えっ？」

「ちょっとお前みたいに訳ありの人間なんだよ。最悪、何人か動かすことになるから。お前が裏から行動してくれた方がありがたい。」
するとビクッと反応し櫛田は頷く。櫛田自身の裏の人格があることは誰にも知られたくないこと。それを聞くのは櫛田にとっても自分の立場を危うくするもんだ。自分だけ特別であるって好奇心が行き過ぎてら信頼関係を壊すことになりかねないと感じたんだろう。小さく頷き俺の部屋から出ていく。その間を使って俺は返信する。
奈緒：どこに行けばいい？
愛里：私の部屋に来れますか？１１０６です。
奈緒：了解。すぐ行く。
と俺はすぐに階段の方へ向かう。見られたくないのでエレベーターなどは使わずに接近した方がいいだろう
そうして佐倉の寮室へと向かった。

「お邪魔します。」
「……どうぞ。」
私服姿の佐倉が俺を出迎え部屋に入るとそこにはきちんと整頓された女の子らしい部屋であった。
つーか無防備にもほどがあるだろ。信用されているのかよくわからないけどさすがに注意しておこうか。
まぁとりあえず俺は一呼吸いれて
「連絡の件の話でいいんだよな？」
さっそく本題に斬りかかった
「は、はい。」
「……とりあえず俺も一度確認している。……この悪質ツイートの件だよな？」
俺がスマホを取り出すとそこにはグラビアアイドルの雫のツイートがあった。
それはたった一枚の写真であり、俺が見ても綺麗に撮れていると思う写真だったのだが……一つだけ違う点があった。
いやそれ以降の写真のブログにはある一言が原因だった

『運命って信じる？僕は信じるよ。これからはずっと一緒だね』
　そしてその後どんどん話は続いている
『いつもきみを近くに感じるよ』
『今日は一段と可愛かったね』
『目が合ったことに気付いた？　僕は気付いたよ』
　俺が雫が佐倉であることはずいぶん早めに知っていたので気がついたのは早かった
「…気づいてたの？」
「気づくだろ。つーか俺が初めてブログを開いた時には書き込みがあった訳だし。」
　と俺は苦笑してしまう。さすがにこれを気づかないのは無理がある。
「それと佐倉、男子の目線結構怖がっている節があるだろ。でも明らかに極端すぎたからな少しブログを見てみたんだよ。そしたらビンゴって訳だ。」
「……そんなに分かりやすかったですか？」
「分かりやすかったな。まぁあんまり知られたくないことだろうし伏せてた。それに一応俺はお前が頼ってくれないと動けない立場だし。それにこれ俺だけでは如何にもならないしな。」
「……へ？」
「俺喧嘩はクソ弱いから。というよりも力関係は通常高校生の平均よりちょい上だからな。」
　俺は少しだけ苦笑してしまう。正直技術がどうにかなる柔道や空手はともかく、レスリングや相撲だとそこそこ強い立場であることは変わりはない。
「そ、そんな。」
「……まぁ助けを呼んでくれたおかげで最強の助っ人を動かすことができそうだけどな。」
「へ？」
　俺はそういうと一本の通知を入れる。
　そうすると数秒後俺の元に一本の返答が返ってきて俺はその結果

に頷く
「最強の助っ人って？」
「堀北先輩と三宅。お前が怯えないようにってことで須藤は正直無理だろ？」
「う、うん。」
「一応三宅も喧嘩は昔していたことは聞いているからな。基本的には口で何とかする予定だからな。それに口が固い方がいいだろ？それまで護衛としておいておけばいい。……正直目立ちたくないだろ。悲劇のヒロインって肩書きは佐倉は嫌がるだろうしな。」
すでに動かせる信頼できる仲間や取引先はすでに用意してある。
そしてすでに水面下では俺も動き始めていたのだ。
「……一応俺以外に二人に事情を話すことにはなるけどな。まぁこういうストーカーは早めに動かせて現地で捉えた方が早い。まぁ佐倉の行動原理からいったら犯人は数人に絞れているからな。」
「犯人ですか？」
「あぁ。一人目は山内。まぁ噂話だけど佐倉に告られたって嘘をついていたはずだ。佐倉がこの状況で告白するとは思えないしな。まぁ、可能性としてはほとんどないと思うけど、佐倉の正体に気づいたのならありえる話だ。外堀から埋めていけばいい話だしな。ぶっちゃけ俺は山内は信用してないからな。よく嘘でポイントをねだりに俺の元に来るし、ぶっちゃけ投資するメリットが少ない。」
ぶっちゃけやっていることは詐欺行為とほとんど同じなんだよなぁ。正直一番クラスでいらないのは山内だし、正直どうやって退学に追い込むかを考えているところなんだけど。まぁ平田がどうなるかわからないし。
「……んでもう一つは電気屋の店員か。おそらくこのカメラを買った時に身バレしたんだろうな。……ちょっと待ってろ。今密偵に探ってもらっているから。」
「密偵ですか？」
「おそらく俺と一緒のところで買っているはずだ。その店員をリストアップすればいい。だからお使いついでに一人に頼んである。」

俺が簡単に答える。密偵＝櫛田だ。好きなものを電子機器で買っていいから店員情報を探ってほしいと頼んである。こういったことは櫛田が向いているのは確かだ。スパイや敵情視察は圧倒的に俺の切り札の一つになっている。
「…えっとその人には私のことは。」
「言ってない。多分まだ気づいてないと思うし写真友達っていうこともしらないだろうけど。」
「そ、そうなんだ。」
と一安心したようにしている佐倉。
「とりあえず作戦を伝えていいか？佐倉にも危険が及ぶから身の安全を固めておきたいんだけど。」
「危険ですか？」
「あぁ。元々この中では犯罪者の対策はほとんどされていないんだよ。学先輩がいうには犯罪が起こらないようにしていたのがこの学校なんだよ。それなのにストーカーという犯罪が発生した。普通に警察沙汰だけどもこの学校には警察が存在せずパトロール隊がいるだけ。すなわち外部の犯行を全く想定していないんだよ。」
そう。俺の予想は当たっていた。監視カメラは生徒の監視のためであり防犯行為を防ぐためになかったのだ。だから防犯対策が少ない。これが致命的に穴であったのだ。
まぁそうそう犯罪なんか起こらない。また外部の人間と触れ合うどころか働いている人しか入れないようになっているがための油断だろう
佐倉は被害者であり助ける優先権がある。いや。今俺の中での優先権はおそらく佐倉が一番上だろう。
だから絶対に助ける。
そう思いながらも俺は話を佐倉に続けた。

人を育てる

俺達はまだ発展途上もいいとこだし、才能の限界なんて分かんないだろ？もしそれを感じることがあったとしたって、それでも上を目指さずにはいられない。理屈も理由も分かんないけどさ。

ハイキュー　ｂｙ澤村大地

俺は珍しくケヤキモールの近くのカフェにメガネをかけた姿でいた。

和人自身元々コンタクトをかけていることもあり、メガネ姿で時々買い物に行く。

本当にバレたくない時やちょっと疲れている時の変化として和人はこの姿を気に入っている。

まぁ実際にバレないので便利なのだが

そうして待っているとするとキョロキョロと視線を向くとするとその少女はすぐに気づく

佐倉愛里は今日は雫として外に立ってもらっている

メガネはおしゃれ用のものだろうか。

元々目立たないように地味にしているが今日だけは目立っているようにしてもらっていた

「よう。待ったか？」

「えっ？だ、大丈夫!!私も今来たところだから。」

「ならよかった。んじゃ行くか？」

と俺は小さく隣を歩く。

「でもよかったの？私のせいでカメラ壊しちゃって。」

「あ～大丈夫。大丈夫。元々メモリーとかは全部壊れたものを先輩たちにもらったから。バックアップも元々とってある方だし。」

と俺は少し苦笑する。壊れたカメラは一応水をかけて壊したことになっており食事中の事故で壊したことにする予定だ。

「それに、メモリーはすべてＰＣにデータは移行してあるしな。てかやっぱスゲェな。グラビアってファッションの勉強とかするのか？」

「えっ？ううん。私はあんまり。でも来てみたい服を選んだらこう

なったから。後本当にクラスの人はこないんですよね」
「櫛田と平田に足止め(期末の勉強会)を頼んである。……唯一危ないのは堀北と長谷部くらいか?参加者リストになかったし。まぁ幸村が参加するのは少し意外だったけどな。」
今回は幸村は参加の方針を向けていた。自分は運動のことや機械については詳しくはない。だから自分が苦手なことをカバーしてくれる人を探したいんだと思っていると言っていた。
まぁ。一種の変化の仕方だろうかそれでも、少し嬉しく思ってしまう。
しばらく話しているとすると目的の場所に辿り着く
ケヤキモールの電子量販店。
少し怖いのか俺の服を掴んでいる
まぁさすがに怖いか。
俺は苦笑し小さく佐倉の頭を撫でる
「……大丈夫だから。」
「へ?」
「悪いけど言葉でしか伝えられないけど大丈夫。安心しとけ。頼られたからには結果でちゃんと応える。そうやってきたからな。今回も手順を間違えなかったら確実に詰められる。」
俺は小さく笑う。するとキョトンとしていたが少し不安そうだけど頷いた。
そうして作戦は実行する。
俺は小さく遠回りして他の商品を見る振りをする。
一応ここの店長には事情を伝えており、警察沙汰にしないのと犯人が確実にその本人だと伝えているようにしてある
後は一手一手詰めていけば確実に潰すことはできるだろう。
そして何かと話をしていく。それはなるべく音声データに残すように俺はしている。
そして確信に変わる。
ここの店員で確定だな
俺は小さく息を吐く。まぁ運が良ければ山内を潰せたのになぁっ

て少し悔やまれるがまぁこの店員にはとことん痛い目にあってもらうか
「愛里。悪い。遅れた」
俺はそうやって手を振る。すると少し安心したようだ。
名前呼びも事前に話してあるしおかしい反応はしていない。
「カメラどうだった？」
「う、うん。部品変更が必要だって言っていたよ。」
「あ～やっぱダメだったか。すいません。えっと修理に必要な書類ってありますか？」
「…えっ？これって。」
「俺のカメラですよ。これ保証書です。愛里にカメラいい奴教えてもらったんですよ。学生でも綺麗に撮れるようなカメラを。」
するとぎょっとする店員に俺は少し笑う
「それじゃあとりあえず修理に必要な書類などをください。えっと代金は？」
「ほ、保証書があれば大丈夫だって。」
「マジか。それなら少し安心かな。」
とおそらく住所などを素早く書いていく。そして記載が終わるとすぐに店から立ち去った。

「……まぁこんなもんだろ。大丈夫だったか？」
「う、うん。」
喫茶店で俺たちは今休憩していた。なおこの後は勉強する予定だしちょうどいいころだろうということなのでカフェに入ったのだった。
「後どれくらいかかるの？」
「あんだけ派手に振舞っていたのならすぐに行動することが多いからな。おそらく今日から一週間で動きがあると思っているな。挑発の意味を込めてるし、一応事情は伝えてないけど美帆にはなるべく寮で一緒にいてくれるらしいから。あそこで問題を起こすわけにはいかないだろうけど。てか佐倉はよくこんな危ないやり方で許可してく

れたよな？」
「大江くんは信用できるから。」
「……俺そこまで信用できるのか？」
少し櫛田にしろ佐倉にしろ信用が実績以上にあると思うのだが
「……うん。大江くんって口では結構厳しいけどでもみんなのことをよく見ているから。須藤くんもあれから真剣に授業受けているし、バスケットボール部の先輩もみんな須藤くんのことを助けて欲しいって頼んでいたよね？」
「……へ？」
「前に写真裏校舎でスポット見つけた時に須藤くんとＣクラスの人が争っていたところ見ちゃったの。」
「……。」
初耳だった。須藤とはあれからも色々晩飯を一緒に食ったり勉強会をしている仲なのに……全く気づかなかった。
「問題になってないってことは……ってもしかして今回クラスポイントが増えていたのって。」
「うん。Ｃクラスとのトラブルが問題だと思う。」
実は七月のポイントはなぜか１６２。５０ｐｔ行事もなかったのになぜか増加していたのである
これで確実だ。
あいつはもう俺が居なくても機能する。
ちゃんと成長しているのである。
…体育祭とかちょっとした重要な時にリーダーとして任せてもいいかもな。
俺は小さく笑みを零す
「先輩も須藤くんも大江くんは信用できるって気を許していたから。それにクラスのみんなも誰も入学したての頃とは違うように見えて。私も変わらないとって思ったの」
「う～ん。……まぁ今回に限ってはいいんだけど佐倉は結構そのままでもいいと思うんだけどなぁ。佐倉って話していると分かるけど結構素を出せるっていうよりも安心できるんだよなぁ。」

「私がですか？」
「いや。だってないじゃん。佐倉って協調性はないけど得意なカメラのことだと饒舌になるだろ？だからとことん自分の好きなことを武器にしたらとことん上に上がれるタイプなんだよ。俺は佐倉がこれからグラビアやるのかカメラマンの方に向かうのかそれともまた別の才能を見出すのかはわからないけど社会にでたら佐倉は成功するタイプだと思うんだよ。」
　俺個人の判断だけどなっと少しいい
「まぁクラスの役にたつかたたないかと言われたら正直微妙なんだけど、佐倉自身俺と同じようにあまりＡクラスに興味がない人間だろ？俺はミホから頼まれたしまぁ、勉強せずに大学に上がれたらラッキー程度だからなぁ。」
「うん。大江くんもなの？」
「あぁ。正直俺の成績さえあればどこにでもいけるからな。」
　高円寺ほどではないけどどのクラスでも希望する学校には行けるだろう。例え差別があろうが俺にはちゃんとした切り札もあることだしな。
「話逸れたけど佐倉は好きなことにはとことん熱中するタイプなんだよ。だからとことんその強みを伸ばしていけばいい。まぁ協調力や勉強も伸ばしていけばもっと今後の人生に選択肢は生まれると思うけどな。」
　俺はそういうとコーヒーを一口啜る
　苦くそして香りの漂う
「まぁ一つの助言程度でいいからな。あんまり深く考えるな。」
「ううん。そんなことないよ。すごくためになった。」
「そっか。それなら良かった。」
　俺は少し笑う。未だにアドバイスなんて柄ではないのだが
『人を育てるって喜びに叶うことなんてないんだよ。』
　昔山小屋で通っていた小さな学校のことを思い出す
　確かに人を育てるってことにハマったのかもしれません。
　俺は数年前とある事件で亡くなった先生のことを思い出す

あの先生みたいになりたいな
また会える日をたのしみにしていてください先生
そんなことを思いながら俺は勉強道具を取り出した